

中野市埋蔵文化財発掘調査報告書

# 西条・岩船遺跡群発掘調査概報

(中野駅南区画整理事業に伴う調査)

1996. 3

長野県中野市教育委員会

中野市埋蔵文化財発掘調査報告書

# 西条・岩船遺跡群発掘調査概報

(中野駅南区画整理事業に伴う調査)

1996. 3

長野県中野市教育委員会

## 刊行にあたって

西条岩船遺跡群は中野扇状地の末端部近く、湧水帯を中心に広がる大きな面積を持つ、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることは従来から知られていました。

この度、西条地籍一帯の区画整理事業に伴い、西条岩舟遺跡群の一部を発掘調査し、記録保存を図ることになりました。調査は昭和63年度から徐々に実施され、今年度にいたっております。

今回、上奏します本書はそのうち、平成4年度に実施しました中野駅南口広場の調査の概要報告書であります。

本報告書が市民の皆様の研究や学習の一助となることを願って止みません。また、最後になりましたが、地元の市民の皆様、多くの関係者にあつく御礼申し上げます。

平成8年3月

中野市教育委員会

教育長 小林治己

## 例 言

- 1 本報告書中野駅南区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査のうち、平成6年度調査分にかかる調査概報である。
- 2 発掘調査は調査団顧問関孝一、調査団長郷道哲章が中心となり中野市教育委員学芸及び調査員関武・池田実男が実施した。

## 目 次

はじめに	
第1節 遺 構	1
1 住 居	1
2 土坑墓	3
3 土 坑	7
第2節 遺 物	13
第3節 まとめにかえて	13
1 遺構について	13
2 遺物について	14
(1) ガラス玉	14
(2) 土 器	14

## はじめに

西条岩舟遺跡群は長野県中野市大字西条、岩船地籍一帯に広がる遺跡群である。中野市は長野盆地の最北端に位置している。

遺跡は盆地の東を画する東部山地から流れる夜間瀬川の形成した中野扇状地の先端部分に分布している。

西条・岩舟遺跡群は、駅南区画整理事業に伴い、平成元年度から、合計7次に渡る発掘調査が実施さ

れている。

本概報は平成6年度調査した中野駅南口広場の整備に伴うものである。

## 第1節 遺構

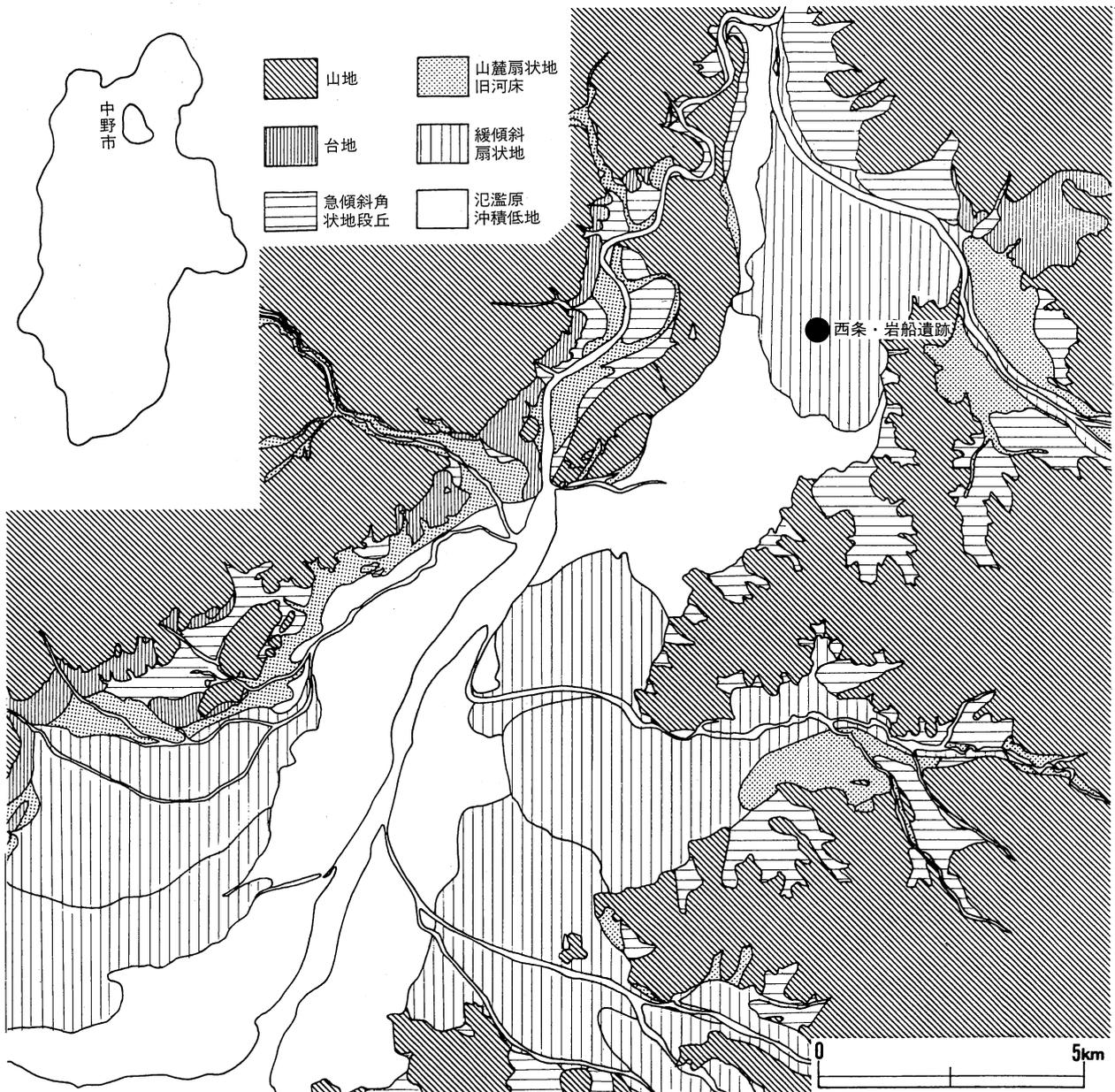
### 1 住居

第1号住居（第5図、6図）

a 位置 B～D-7、8グリッド

b 規模と形態 径約5Mの円形

c 遺物出土状況 西側部分の壁付近に大形破片



第1図 遺跡の位置（その1）



第2図 遺跡の位置 (その2)

の土器が約1 固体分出土したほか、破片が北東部分の覆土中に散在していた。

d 壁 良好に検出された。

f 床面 軟質であり、下層の黒色礫層との識別が困難であった。

e 柱痕 7 箇所を確認している。焼失住居であったため、柱に使用されていた木材のおよその太さ（径約10~19cm）を確認できた。

g 覆土の堆積状況 焼失した炭化材の層に土砂が堆積していた。西壁の土坑を覆うように焼土が堆積し、大きな石に覆われていた。石の下位は空洞であった。

h 炉跡 確認できなかった。

i 周溝 認められない。

J 備考 焼失住居であり、炭化した材が残っていた。屋根の一部と思われる炭化物や稲穂なども確認できたが、うまく取り上げることはできなかった。

## 2 土坑墓

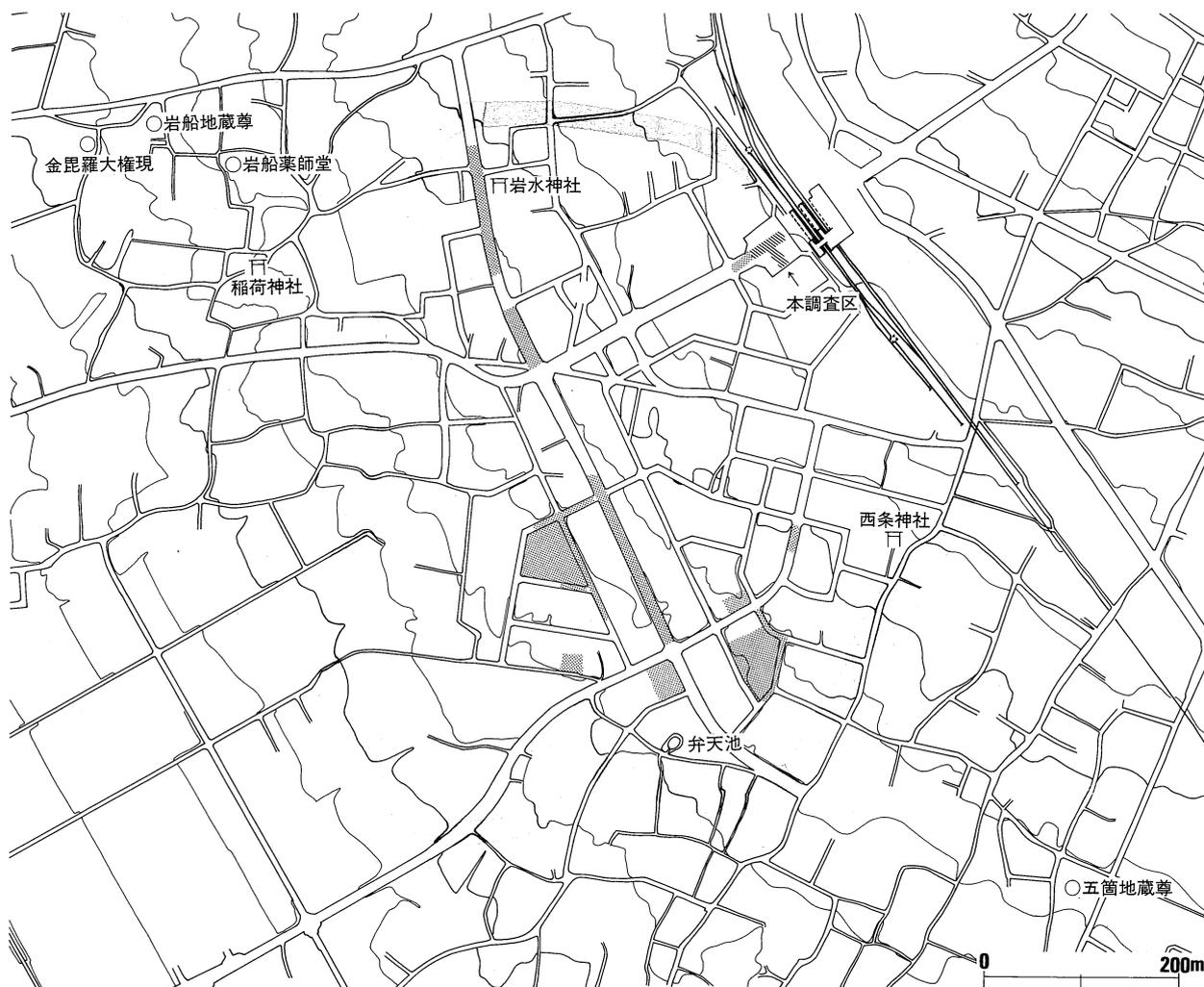
第1号土坑墓（第7図1）

a 位置 E、F-3グリッド

b 形態 長楕円（ただし長軸方向の壁は並行している）。320×176×48cm。

c 遺物出土状況 検出面より上面から覆土上面に土器が散在していたが、本土坑墓にともなうかどうかは明らかでない。

d 覆土 3層に分層された。



第3図 調査区的位置

第2号土坑墓（第7図2）

- a 位置 F-2、3グリッド
- b 形態 348×216×28cmの不整形。おそらく、二つ以上の土坑の切り合いと考えられる。
- c 遺物の出土状況 遺構の検出面より、上位から覆土上面に土器が散在する。本土坑では壺が一個体横に倒れた状況で検出されている。これらの遺物が本土坑墓に伴うかどうかは判然としない。
- d 覆土 3層に区分された。

e 備考 北側隅でピットと切りあう。

第4号土坑墓（第8図4）

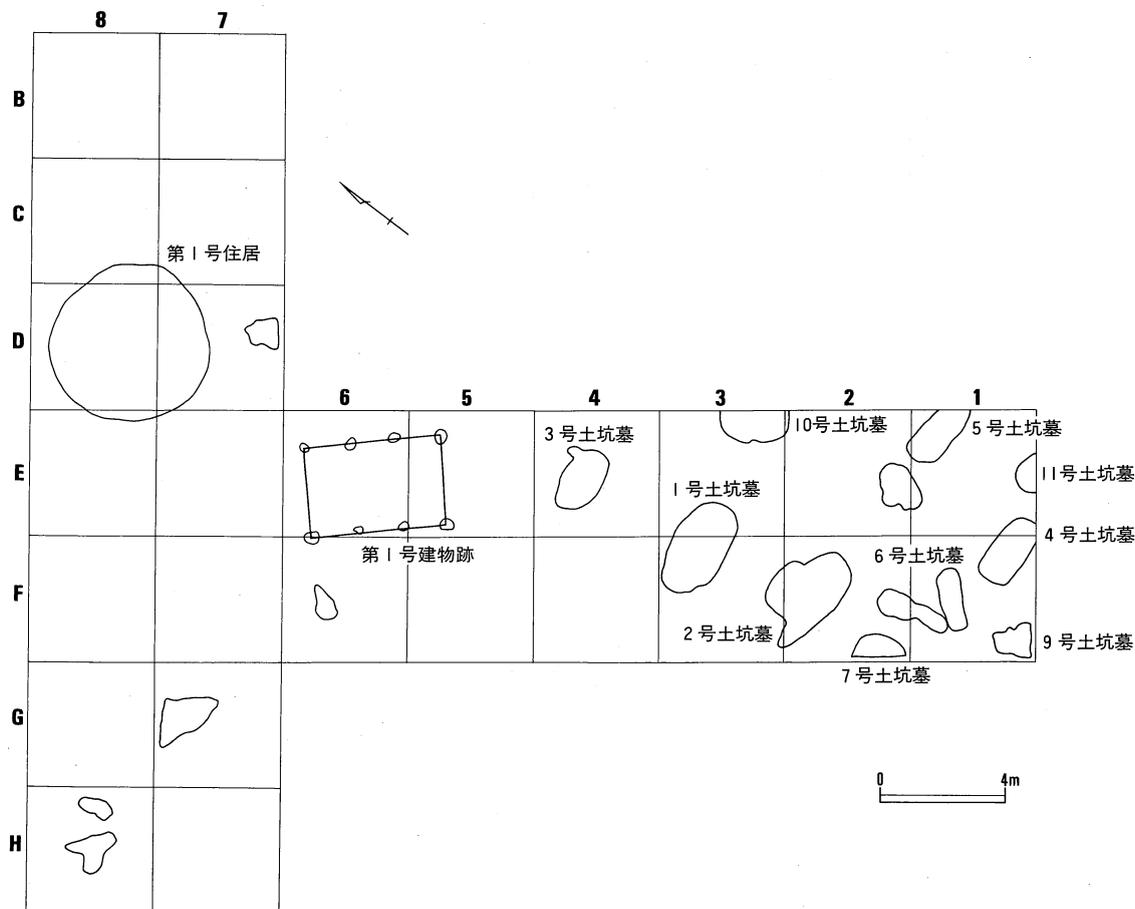
- a 位置 E、F-1グリッド
- b 形態 隅丸長方形。232×116×38cm。南東隅が調査区外に延びる。
- c 遺物出土状況 土坑墓の中央より、長軸方向やや東側に、176個のガラス玉（ビーズ大）が、土坑底部に集中して出土した。
- d 覆土 3層に区分される。

第3号土坑墓（第8図3）

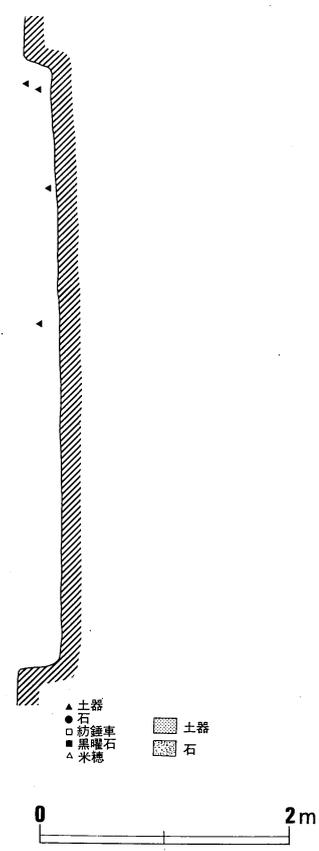
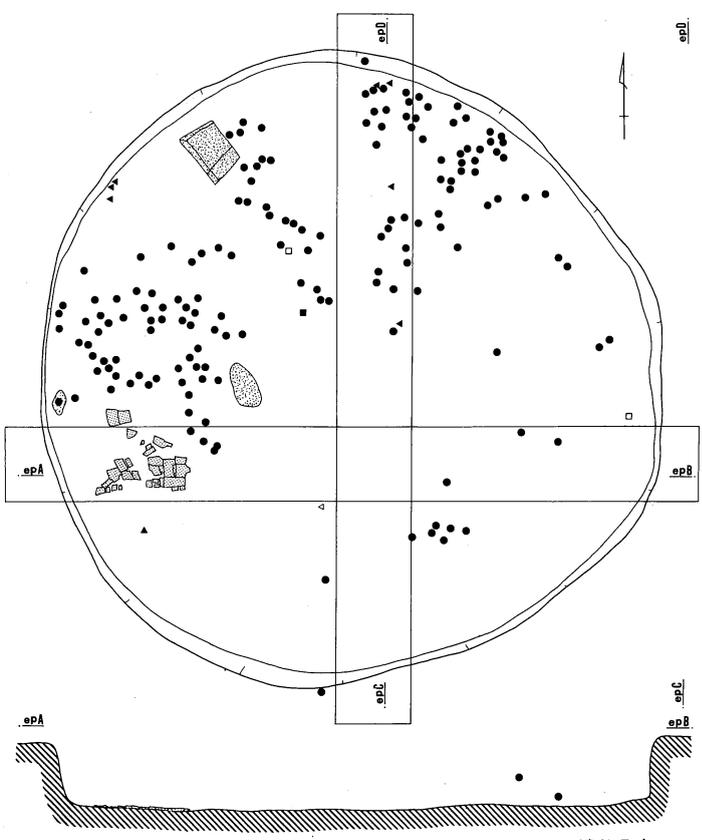
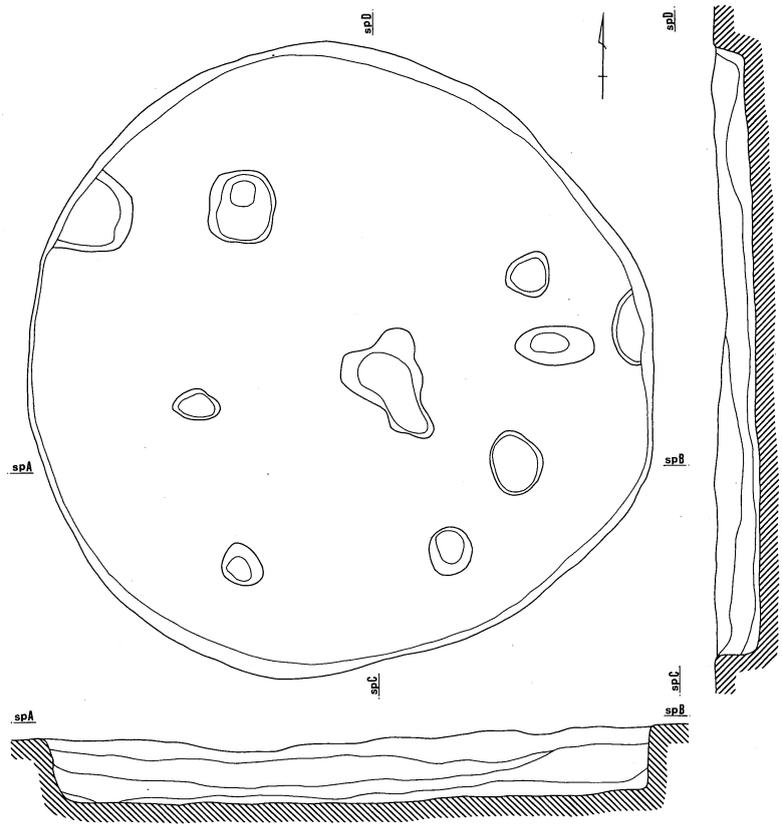
- a 位置 E-4グリッド
- b 形態 隅丸長方形。220×126×56
- c 遺物の出土状況 検出面上にわずかであるが、土器片が散在する。
- d 覆土 3層に区分された。

第5号土坑墓（第8図5）

- a 位置 E-1グリッド
- b 形態 隅丸長方形
- c 遺物の出土状況 土坑墓の中央、やや西よりの位置で、床面よりやや浮いた状態で185個のガラス玉が出土した。ガラス玉は密集した部

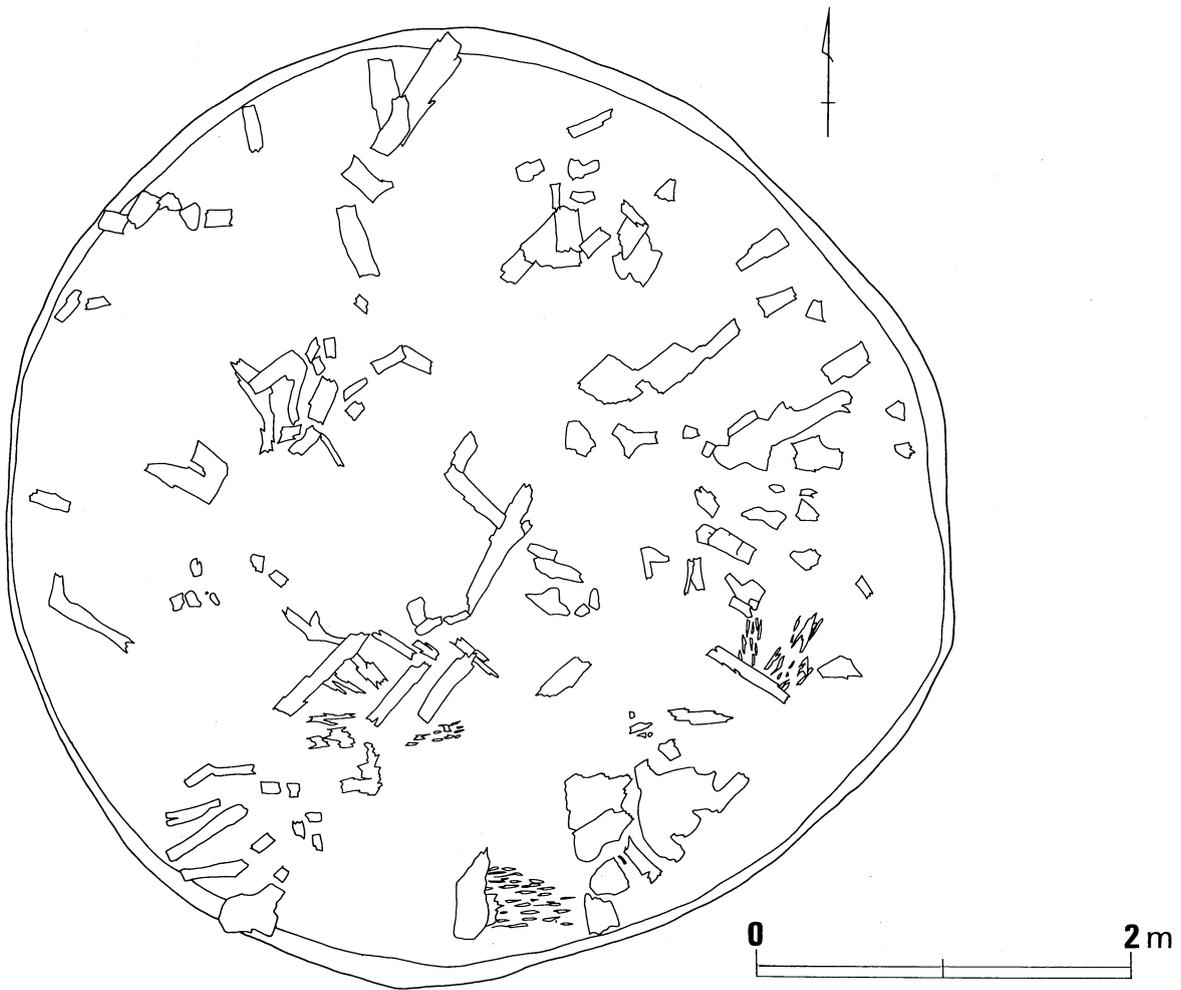


第4図 遺構配置図

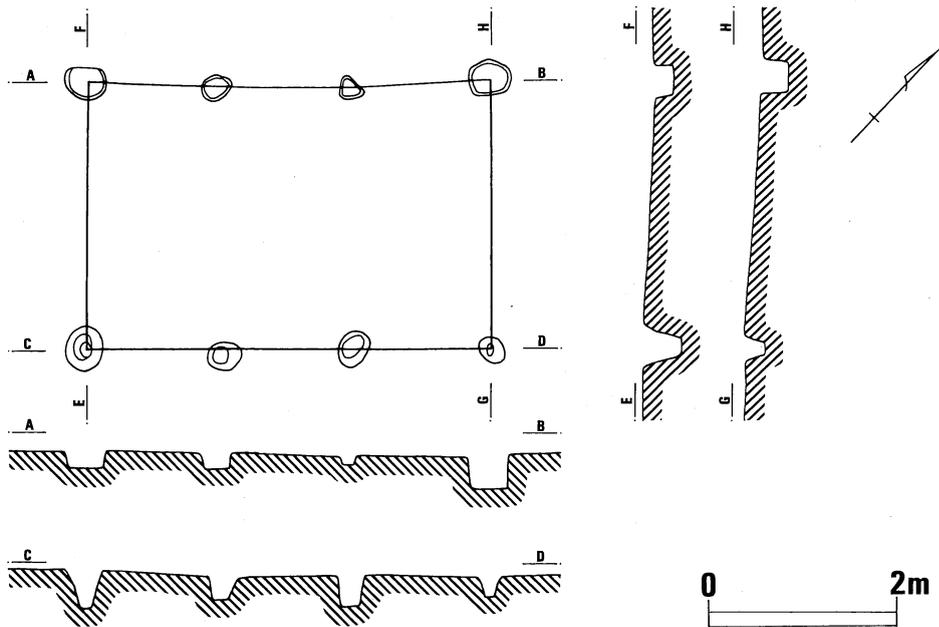


遺物分布

第5図 第1号住居



炭化物出土状況



第6図 第1号住居・第1号建物跡

分を中心に120×56cmの楕円形に分布している。

長さ約40cmと20cmの川原石が東側に偏って検出されている。

#### 第6号土坑墓（第9図6）

a 位置 F-1グリッド

b 形態 隅丸長方形。200×76×4cmを測るが、壁の状態は良くない。

c 遺物の出土状況 遺物は出土していない。検出面の上位にわずかに土器が散在するが、本遺構に伴うか否か判然としない。

d 覆土 単層

#### 第7号土坑墓（第9図7）

a 位置 E-1グリッド

b 形態 大半が調査区外のため全形を知ることができない。現状では64×124×40cmを計測する。おそらく、隅丸長方形の土坑墓になると思われる。

c 遺物出土状況 わずかな土器片が覆土中より検出された。

#### 第8号土坑墓（第9図8）

a 位置 E-1、2グリッド

b 形態 168×116×28cm。不整形ではあるが、隅丸長方形の平面プランになるものと思われる。

c 遺物の出土状況 検出面でガラス玉1個を検出した。

d 覆土 2層に分層された。

#### 第9号土坑墓（第9図9）

a 位置 F-1グリッド

b 形態 二つの土坑の切り合いである。両者とも隅丸長方形の平面プランになるものと思われるが、調査区外にのびており、はっきりしない。

c 遺物の出土状況 覆土内に散在していた。

d 覆土 3層に分層された。

#### 第10号土坑墓（第9図10）

a 位置 E-3グリッド

b 形態 隅丸長方形を呈するものと思われる。一部調査区外に延びる。現況では224×100×52cmを計測する。

c 遺物の出土状況 南側に偏った部分にガラス玉が13個出土している。

d 覆土 3層に分層された。

#### 第11号土坑墓（第9図11）

a 位置 F-2グリッド

b 形態 調査区外に延びるため、全形は不明。現況では168×72×32cmを計測する。

c 遺物出土状況 検出面上方及び覆土上面にわずかに土器片が出土している。まだ、床面近くに礫が認められた。

d 覆土 2層に分層された。

### 3 土坑

#### 第1号土坑（第9図1）

a 位置 F-6グリッド

b 形態 不整形な長円形。116×60×28cm。

c 遺物出土状況 拳大から人頭大の礫が覆土の中心に集中して検出された。

d 覆土 単層。

#### 第2号土坑（第10図2）

a 位置 G-7グリッド

b 形態 不整形な三角形・186×156×12cm。

c 遺物出土状況 検出面の上方に土器片が散在していたが、本遺構に伴うかどうかは不明。

d 覆土 2層に分層された。

e 備考 河川による侵食を受けたと考えられる部分に位置し、遺構かどうか判然としない。

### 第3号土坑（第10図3）

- a 位置 D-7グリッド
- b 形態 不整形。床面にピットあり。104×96×30cm。
- c 遺物出土状況 遺物は出土しなかった。
- d 覆土 3層に分層された。
- e 備考 検出が困難なため不整形になってしまったとも考えられる。場合によっては土坑墓の可能性もある。

### 第4号土坑（第10図4）

- a 位置 H-8グリッド
- b 形態 不整形。床面にピットがある。
- c 遺物出土状況 遺物は上面と覆土から、わずかに出土している。上面のものは遺構に伴うかどうか不明。
- d 覆土 2層に分層された。
- e 備考 河川の侵食を受けたと思われる部分で検出した。遺構かどうか不明。

### 第5号土坑（第10図5）

- a 位置 F-1～2グリッド
- b 形態 不整形な検出になっているが、北側半分は比較的整った形態をもっており、南側部分は何らかの攪乱が及んでいるかも知れない。北側部分のみで遺構が構成されていたとすれば、隅丸長方形の土坑（120×80×20cm）となろう。
- c 遺物出土状況 遺構検出面の上面に、壺形土器の大型破片が一個体分検出されている。また、覆土内にもわずかに土器片が検出された。
- d 覆土 3層に分層された。
- e 備考 遺構検出面より上位で検出された一個体分の壺形土器が土坑に伴うかどうかは判然としない。遺構に伴わないとすれば、単独で壺棺を構成していたと考えられる。

### 第6号土坑（第10図6）

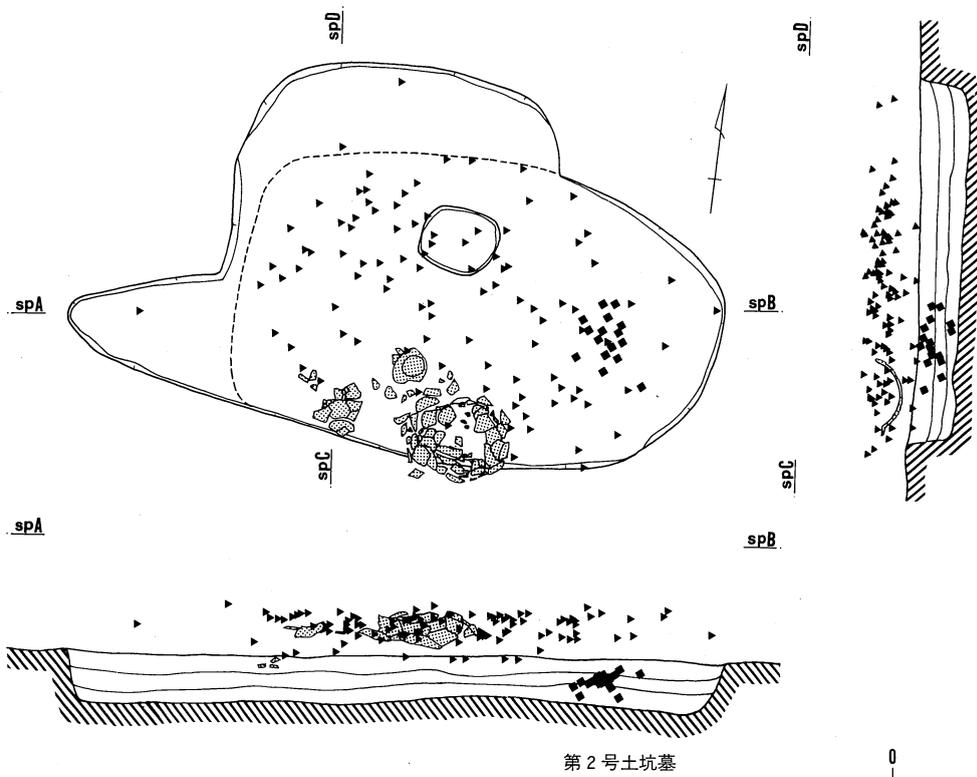
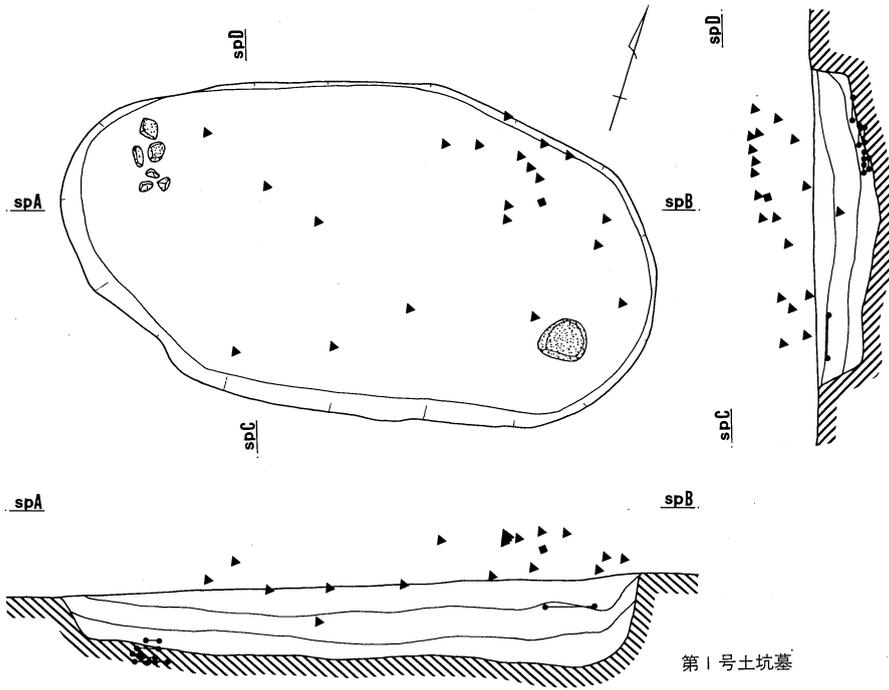
- a 位置
- b 形態 112×56×8cmの不整楕円形。
- c 遺物出土状況 拳大の礫が床面から出土したのみである。
- d 覆土 2層に分層した。
- e 遺構 河川の侵食を受けた部分から出土しており、掘りこみも浅く、遺物も出土していない。遺構でない可能性が高い。

## 4 壺棺

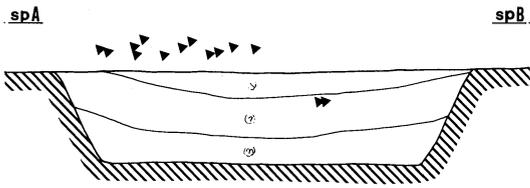
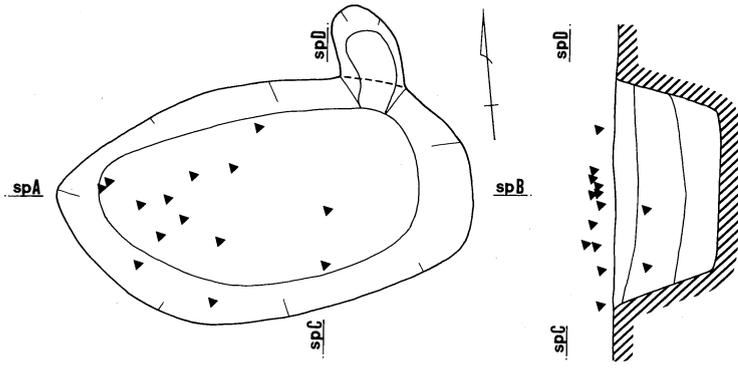
### 第1号壺棺（第10図）

- a 位置 E-2グリッド
- b 検出状況 56×48×32cmの摺鉢状の土坑内に三个体分の壺型土器が組み合わされた状態で埋設されていた。二つの壺型土器の口縁部が互いに向き合うように組み合わせられ、もう一つの個体が繋ぎあわせた部分を側面から覆うように設置されていた。
- e 備考 下位には土坑墓や土坑は確認できなかった。おそらく、単独のものと思われる。第2号土坑墓の上面で検出されたものも本例と同様に単独であった可能性もある。

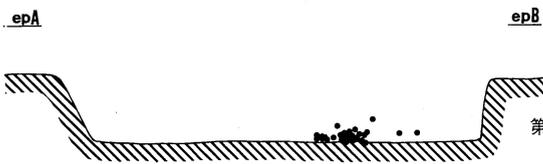
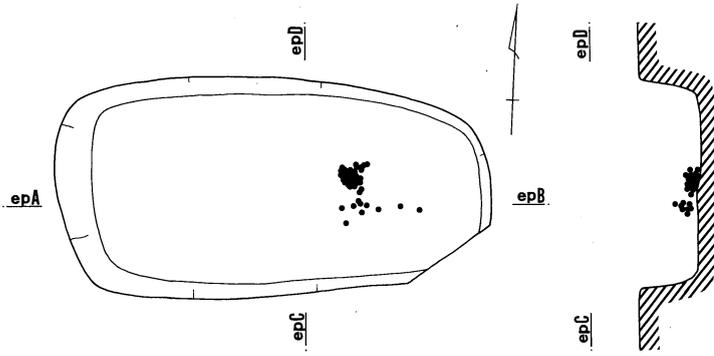
- 石
- ▲ 土器
- ビーズ



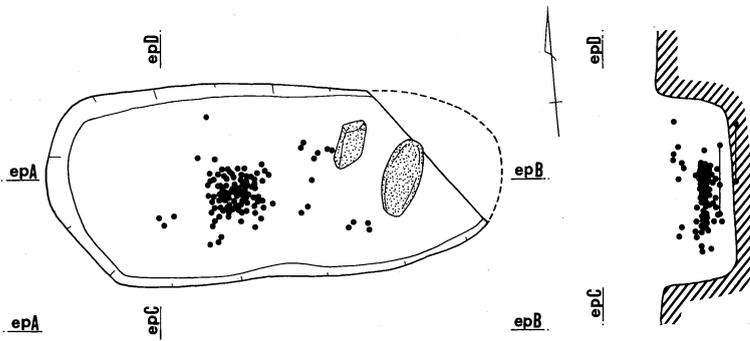
第7図 土坑墓



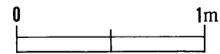
第3号土坑墓



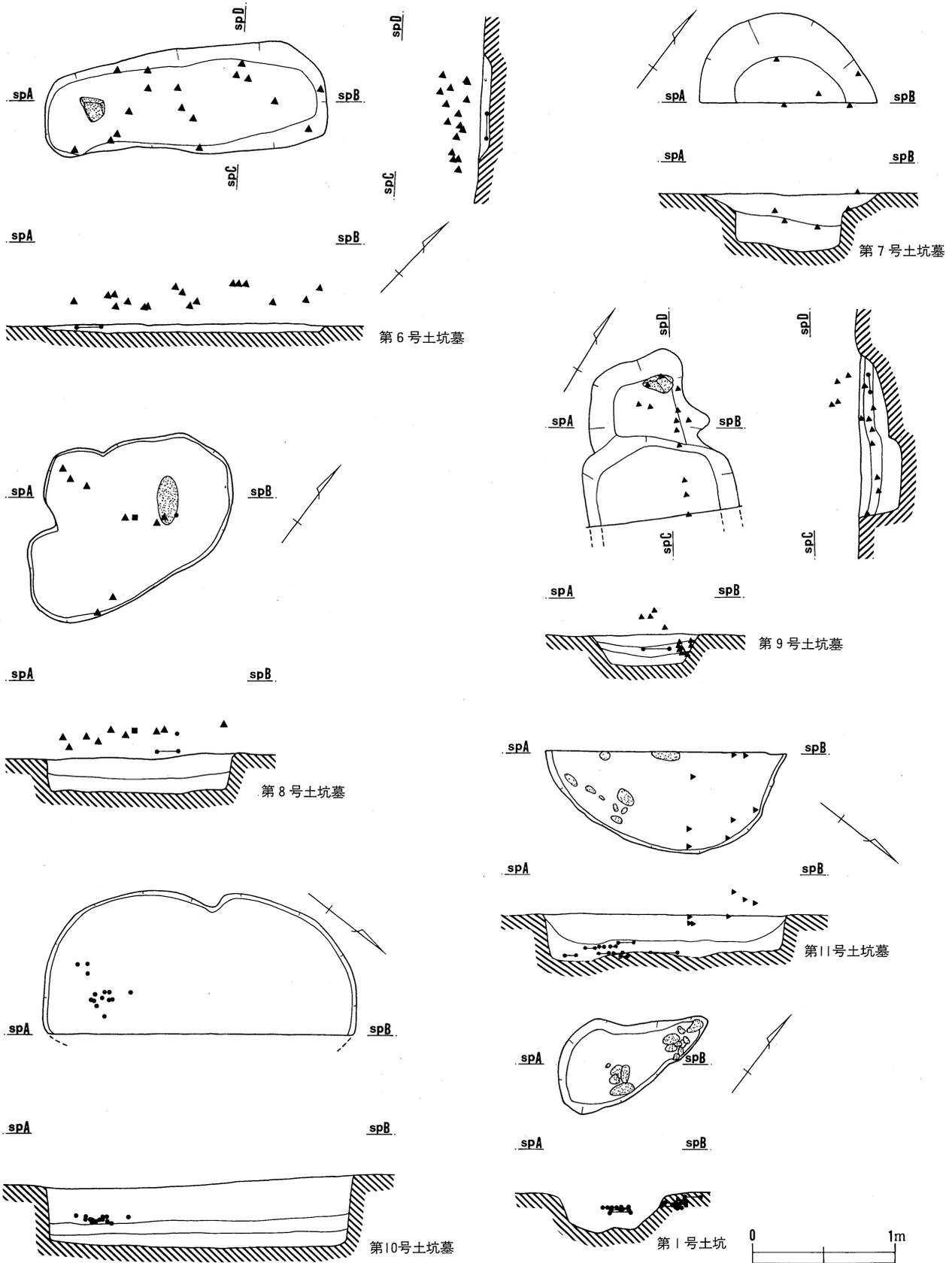
第4号土坑墓



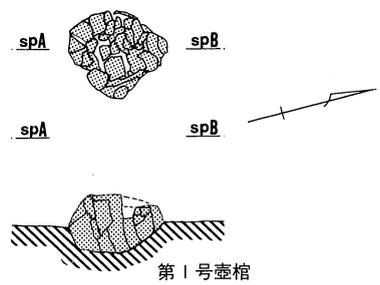
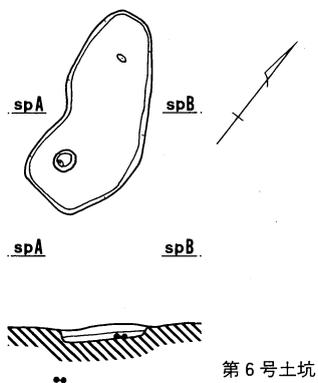
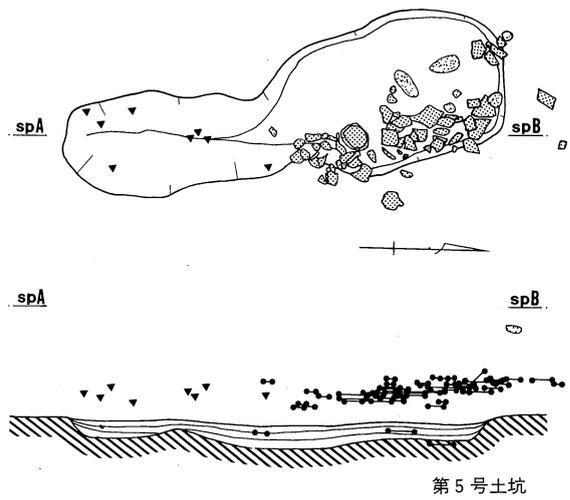
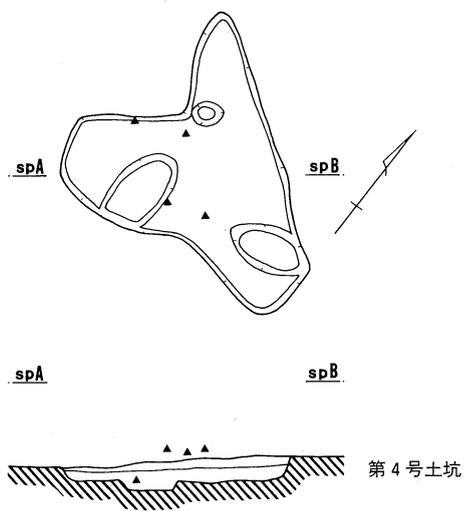
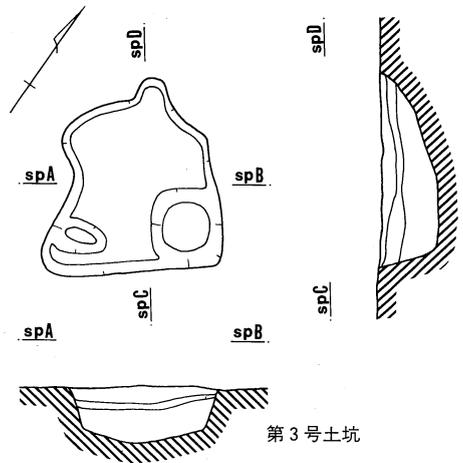
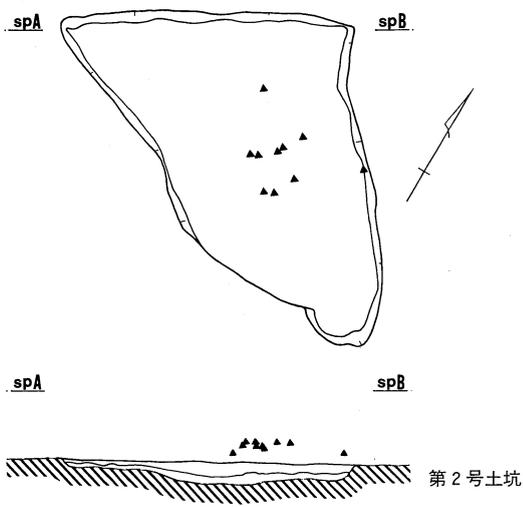
第5号土坑墓



第8图 土坑墓



第9图 土坑墓·土坑



第10图 土坑·壺棺

## 第2節 遺物

中野駅南口広場の整備事業に関わる発掘調査で検出された遺物は7個体の壺形土器である。いずれも、口縁部を欠いており、完形を知ることはできないが、多くの類似性を有している。器形は栗林式の壺型土器に類似し、頸部には櫛状工具あるいは篋描きによる平行沈線文が描かれているものと思われる。

これら、7個体の壺型土器は先述したように似ているが、2類に細分できそうである。

### 第1類（第11図1、2）

二例とも口縁部以上を欠いているため、その全形を知ることができないが、胴部最大径が中位にあり全体として算盤玉のような形をしている。

表面はハケ整形の後ヘラミガキがされるが、丁寧でなく所々にハケの痕跡が残る。内面はほぼ前面にハケ整形がなされる。

### 第2類（第12図3～第14図7）

いずれの例も口縁部以上を欠いており、全形を知ることができない。胴部最大径が下位にあり、栗林式土器に似るが、最大径以上のプロポーシオンは栗林式が直線的になるのに対して、やや外側にゆるやかに膨らむ特徴をもつ。屈曲部はゆるやかなカーブを描き、稜線をもたない。

第12図3と第13図5、6には頸部の文様が認められる。3は横走する篋描直線文が施文され、その下位に篋で三角形のモチーフが描かれる。三角形の内側は篋描直線文で充填される。5は篋描による平行な直線文がめぐらされる。横走する篋描直線文は縦方向の篋描き直線文によって、区切られている。6は篋描直線文が頸部に見られる。

いずれもの土器も外面はハケ整形が全面に認められる。

これらと同類と思われる例が幾つか西条岩船遺跡で知られている、第21図84、第21図86、第21図87、第23図105、第23図106がそれである。

これらはいずれも単独で出土しており、共伴する他の器種は不明である。

栗林式土器の器形と類似性を持ちながらも、微妙に異なり、総じて大型となる。また、頸部の文様は箱清水式土器のそれにつながる要素をもっている。

こうした点からみて、これらの壺型土器は栗林式土器と箱清水式土器とを繋ぐ土器群、吉田式の範疇に含まれる土器群と考えてよいであろう。

## 第3節 まとめにかえて

### 1 遺構について

土坑墓群の検出が特筆される。狭い範囲に9基の土坑墓が検出された。この数は決して少ないとはいえない。調査区外に相当多くの土坑墓が存在するものと思われ、この地区一帯に墓域が形成されたと考えることができよう。

土坑墓の時期については明確ではないが、覆土出土の土器や検出面で検出した土器から、弥生時代後期初期のものと考えられる。

形態的には隅丸長方形のものが大半を占めている。埋葬施設、例えば木棺の存在等も考慮して、調査を進めたが、そうした痕跡を確認することはできなかった。

中野市周辺では、安源寺遺跡の土坑墓群が良く知られているが、安源寺遺跡の土坑墓では覆土上面に多くの土器が検出されている。

しかし、今回の土坑墓では検出面よりやや高い位置で土器片が散在していたが、土坑墓の覆土に大量に含まれることはなかった。

ただ、注意したいのは土坑墓の検出面よりやや浮いた状況で一個体分の壺型土器が検出された第2号土坑墓の存在である。検出された時点では落ち込みは確認されなかった。これを壺棺として独立して扱うのか、検出されなかったが、土坑墓の覆土中と考えるのか。仮に、覆土中のものと考えれば、安源寺遺跡と土坑墓との関連性が考慮される。

また、幾つかの土坑墓で検出されたガラス玉の副葬にも注意しておくべきであろう。まず、ガラス玉が検出された土坑墓とされない土坑墓の二者がある

ことに注意しておきたい。

次に、土坑墓内での出土状況であるが、土坑墓の長軸方向どちらかに偏って、集中して検出されている。かなり良好な形で原位置を保っているとしてよいであろう。ガラス玉の出土位置は丁度遺体の胸の部分に相当すると思え、一つに集中していることから、ネックレスではないかと考えている。

壺棺は壺を組み合わせたもので、青木一男の分類のB2式に相当するものである。横位に埋設されていた。壺内から遺物を検出することはできなかった。

## 2 遺物について

### (1)ガラス玉

今回の調査で特筆すべき遺物として、総数400近くを検出したガラス玉をあげることができよう。

ガラス玉についてはまだ分析してないが、スカイブルーのものとコバルトブルーの二者がある。大きさはいずれもビーズ大である。

今のところ、県下で一遺跡からこれほど大量に出土した例を知らない。おそらく、出土数は県下有数のものであろう。西条岩船遺跡の弥生時代後期初頭の集落の性格、この地域が果たしていた役割を考えるうえでも極めて重要であろう。

### (2)土器

出土した土器は弥生時代後期初頭（吉田式土器）に位置付けられるものと思われる。しかし、中野市周辺では中期後半から後期にかけての土器群の変遷が具体的には明らかにはされていない。

その意味で、今回の資料は大きな意義をもつ。そこで今回の資料から考えられる中期後半から後期にかけての土器群の変遷について概観しておきたい。そうすることで、本資料のもつ意義は一層明らかにされると考える。

#### （中期後半栗林式土器の分類）

栗林式土器の変遷についてはカメ型土器の変遷と壺型土器の変遷の組み合わせを用いて、都合6段階

の変遷を考えている。

栗林式のカメ型土器は7類に細分されると考える（第27図）。

第1類：胴部から頸部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部が逆「L」字状に外反する。栗林遺跡出土例では頸部から胴部にかけて、横走する櫛描直線文が施文されている。

第2類：頸部がゆるやかにくびれ、ゆるやかなカーブで底部に至る器形をもつ。文様には縦方向の櫛描直線文、横走する櫛描羽状文などが見られる。胴部をめぐる刺突文が多く見られる。

第3類：頸部のくびれが強くなると同時に胴部のふくらみが強くなる。器高に比べて、胴部最大径が大きく、寸詰まりな形態である。

文様は多様化し、櫛描波状文、縦走する櫛描羽状文、頸部の簾状文などがある。

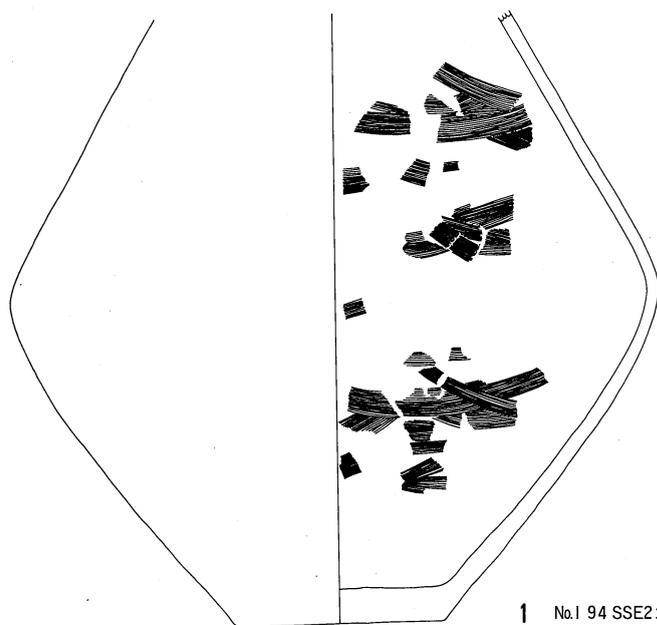
第4類：頸部のくぶれが強く、胴部最大径が胴部中位にあり、やや胴部の長い器形である。文様は第3類と同様である。

第5類：口縁部が「く」の字状に外反し、胴部最大径は胴部中位にある。胴部全体のプローションが丸みを帯び、最大径以下でもやや膨らむ器形となる。

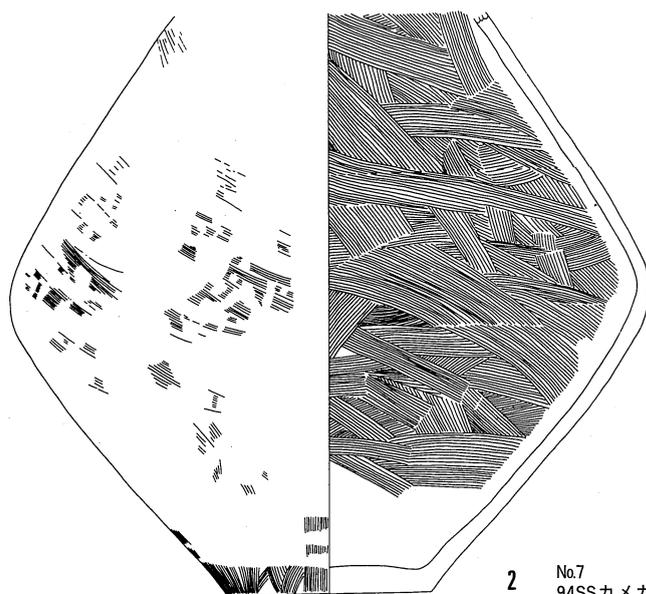
文様のバリエーションは少なくなり、胴部全体に櫛描波状文が施文されるものが目立つようになる。

第6類：口縁部は「く」の字に外反し、胴部最大径が上方にあがり、肩を形成する。口縁端部がそのまま外反するもの（a）と受け口状に段を形成するもの（b）がある。文様には櫛描波状文が多用されるようになる。また、胴部上半は櫛描波状文、下部は縦走の羽状文が施文されたものが特徴的に出現する。

第7類：口縁部が受け口状にゆるやかにカーブし



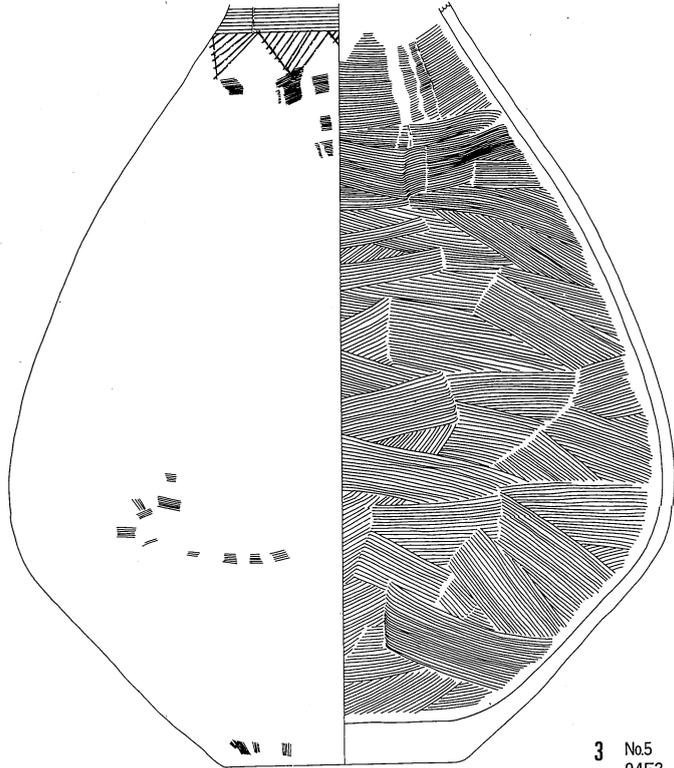
1 No.1 94 SSE2カメカン 1号



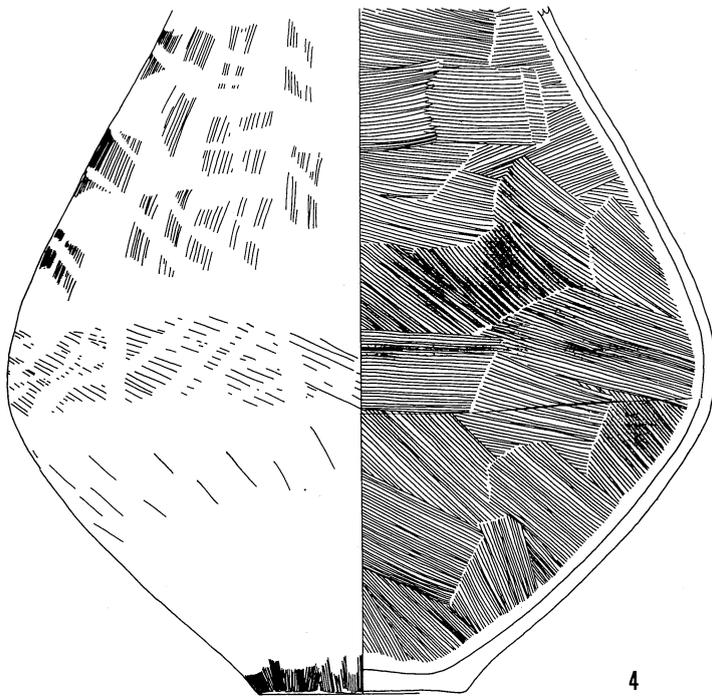
2 No.2 94SSカメカン 2号



第11図 94年度調査出土土器



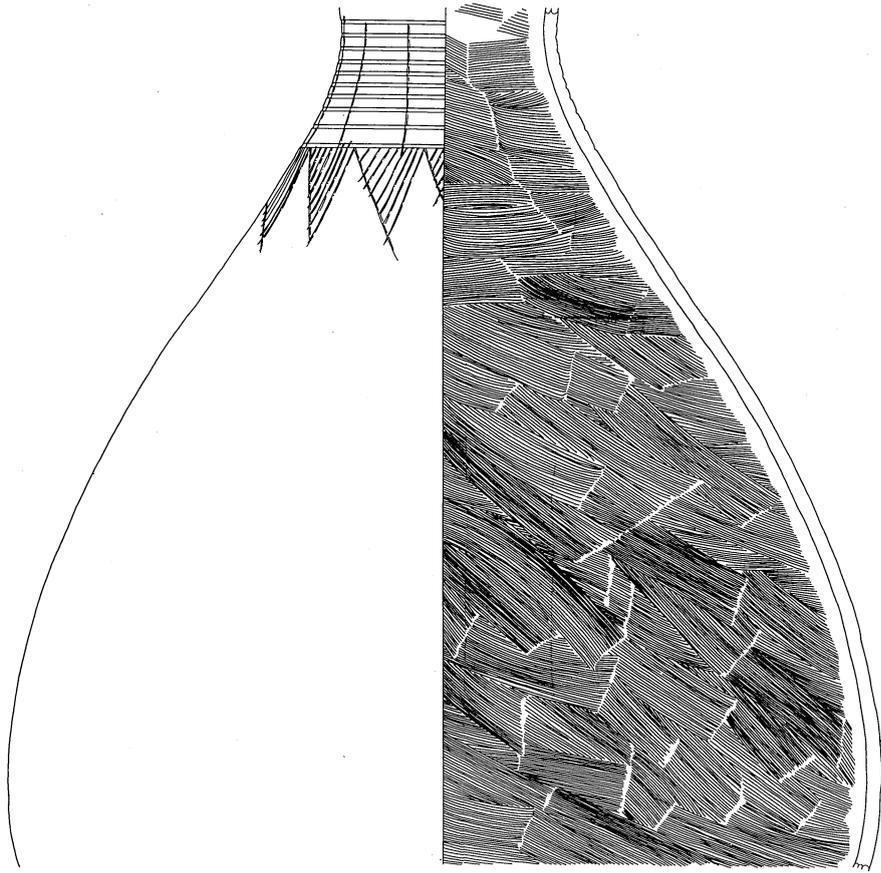
3 No.5  
94F2  
カメ棺2号



4  
No.4 94F2  
カメ棺2号

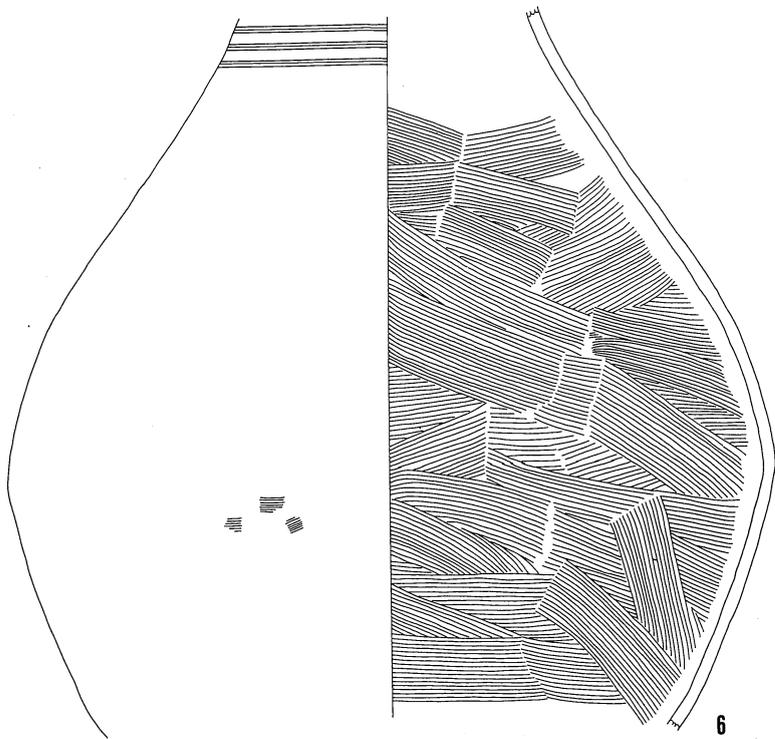


第12図 94年度調査出土土器



5

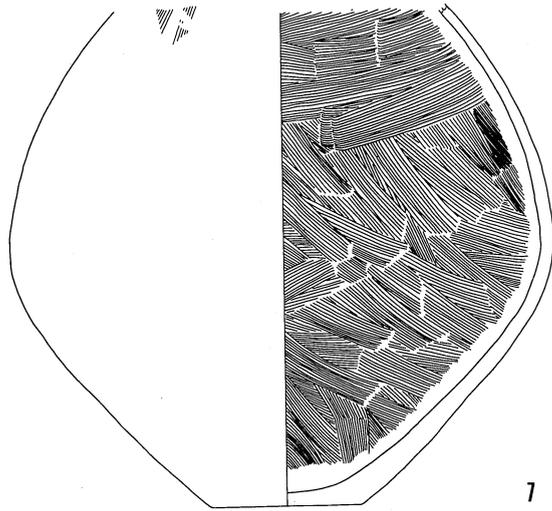
No.3 94F2カメ棺No.2



6

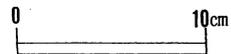
No.10 94F2  
カメ棺No.2

第13図 94年度調査出土土器

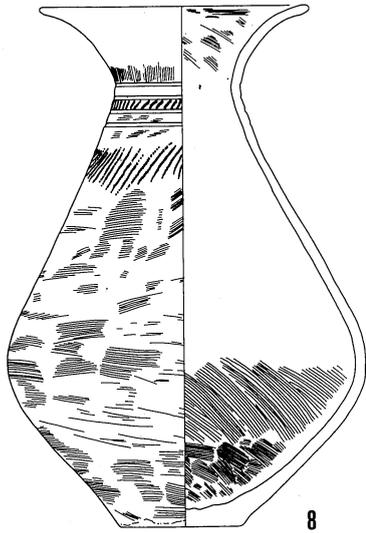


7

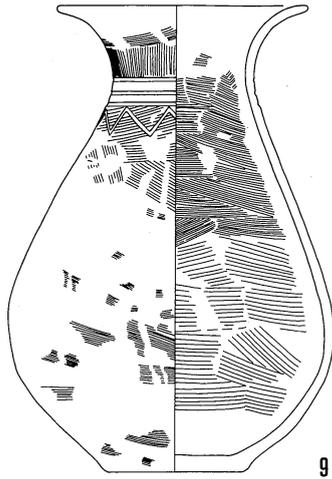
No.6G494  
カメカンNo.3  
Fl.2.土器集



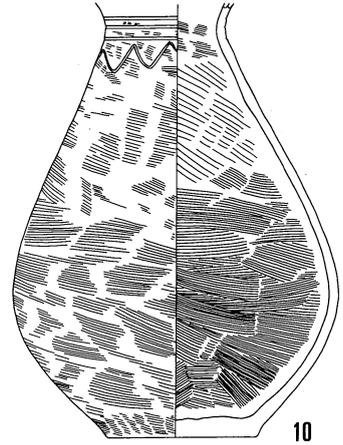
第14図 94年度調査出土土器



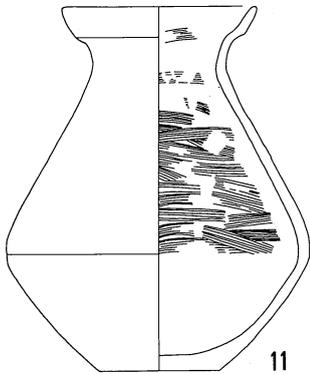
8  
14住



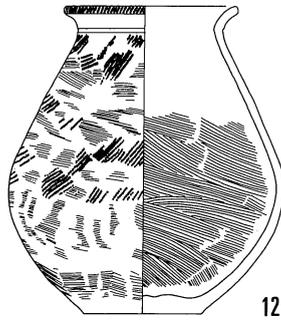
9  
14住



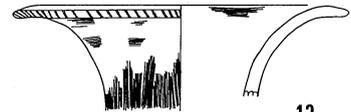
10  
No.69 トヨ92  
14住No.20



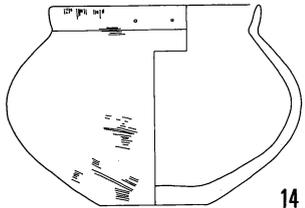
11  
14住



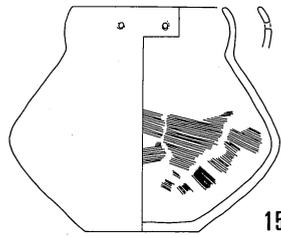
12  
14住



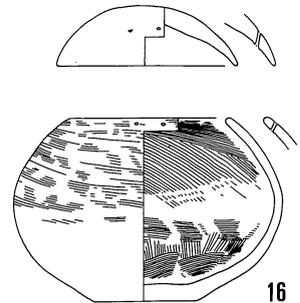
13  
14住



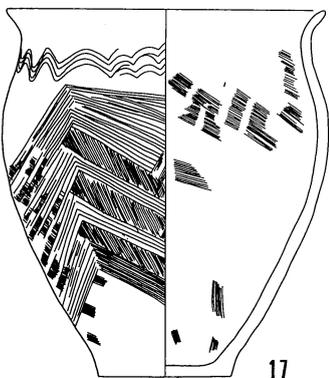
14  
トヨ9214住



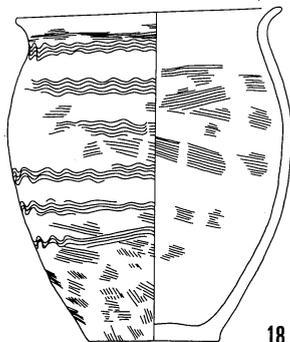
15  
No.60  
14住No.17



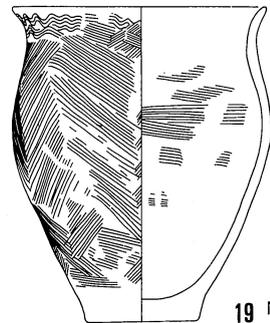
16  
トヨ9214住  
No.63



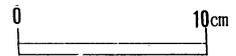
17  
No.88  
トヨ9214住9



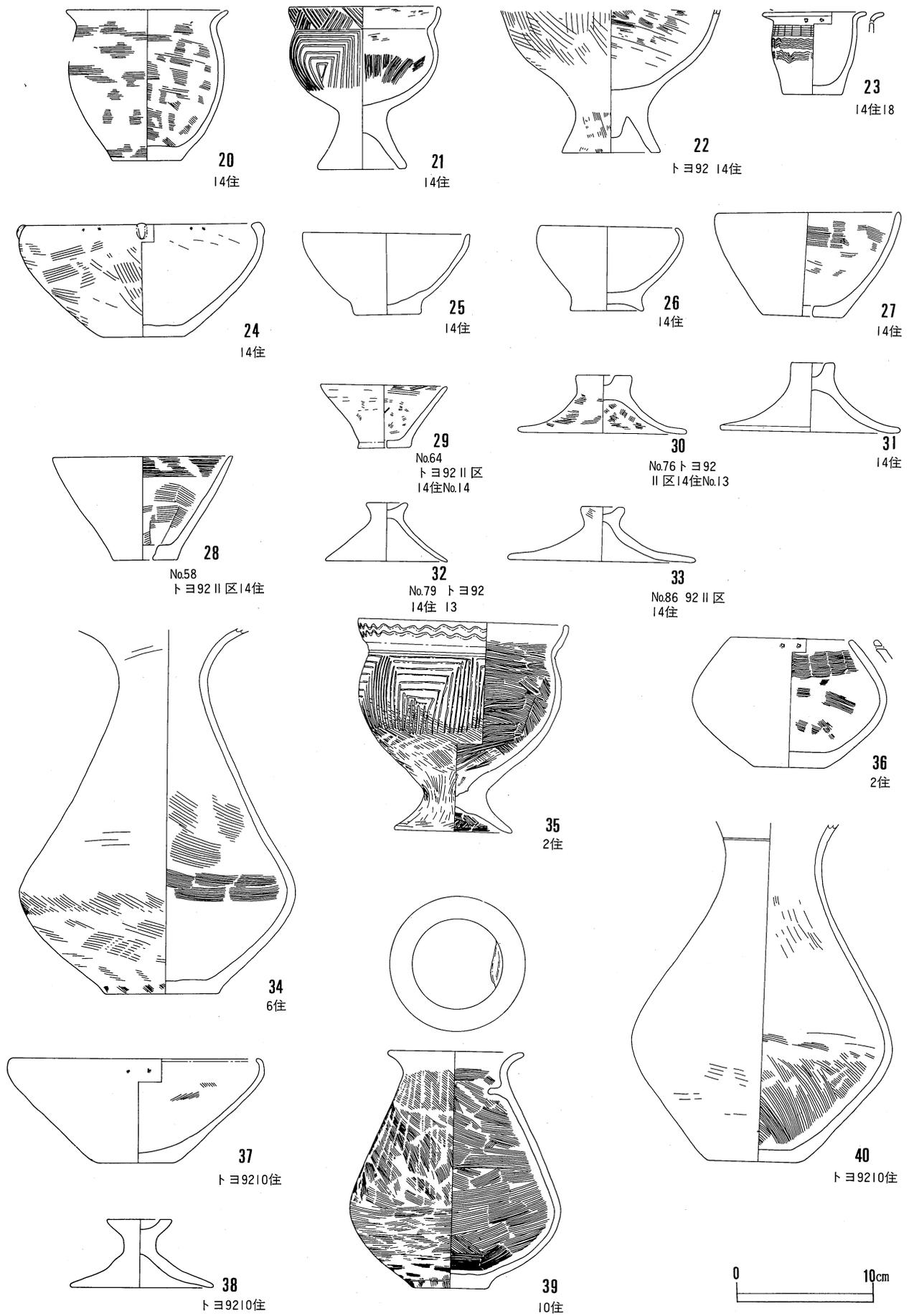
18  
No.98 トヨ9214住27



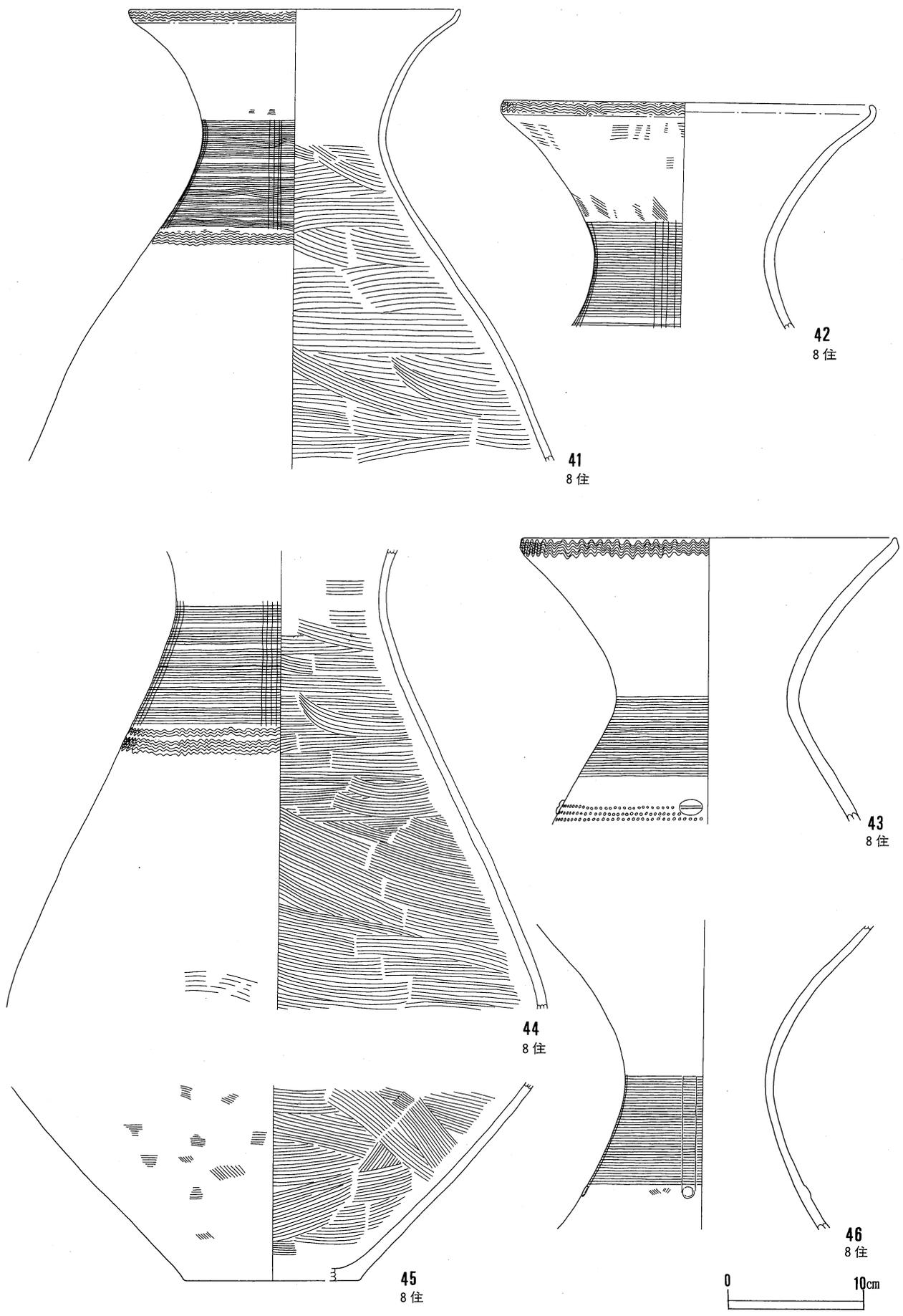
19 No.85  
トヨ9214住No.10



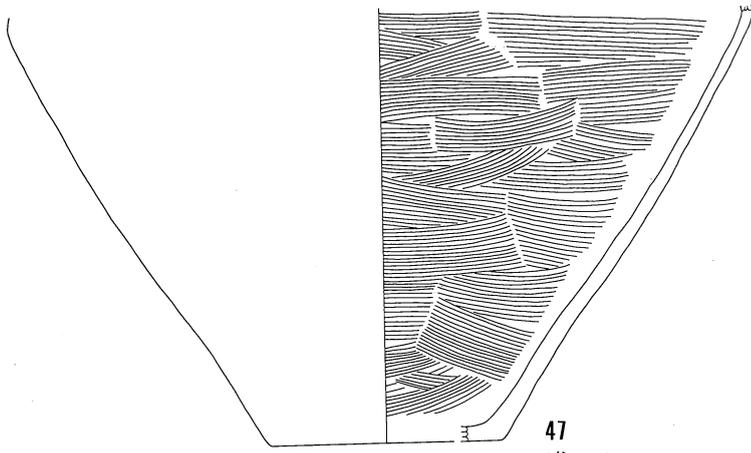
第15図 92年度調査出土土器



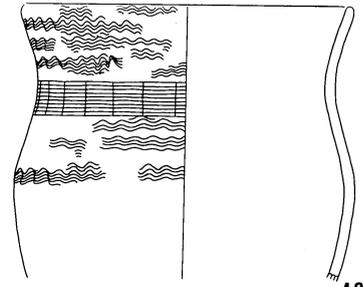
第16図 92年度調査出土土器



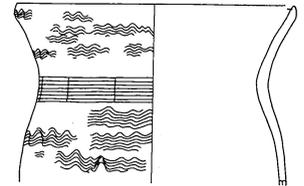
第17图 92年度調査出土土器



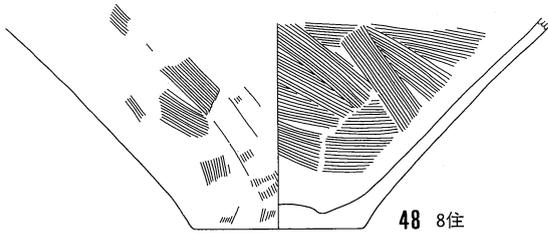
47  
8住



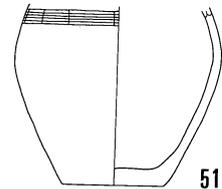
49  
No.37  
トヨ92 II 区8住



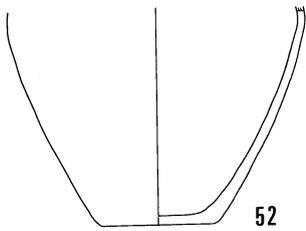
50  
8住



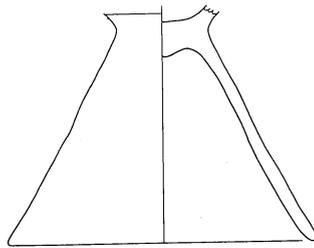
48 8住



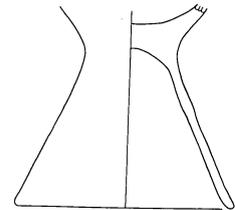
51  
8住



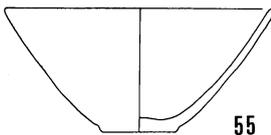
52  
8住



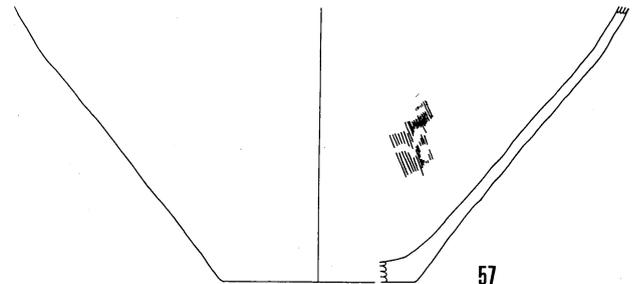
53  
8住



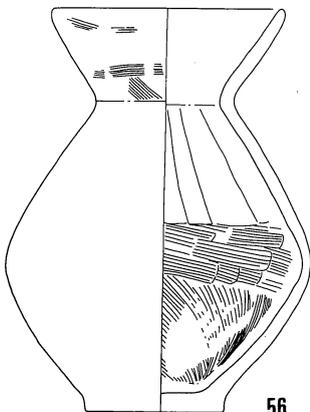
54  
8住



55  
8住



57  
12住

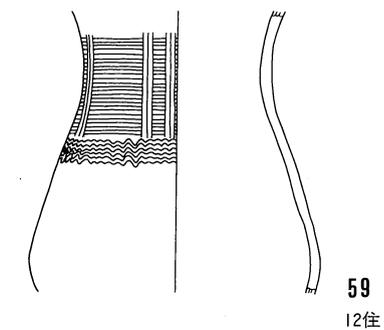


56  
12住

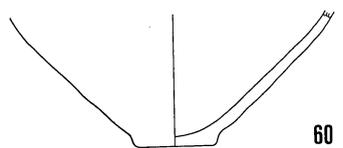


58  
12住

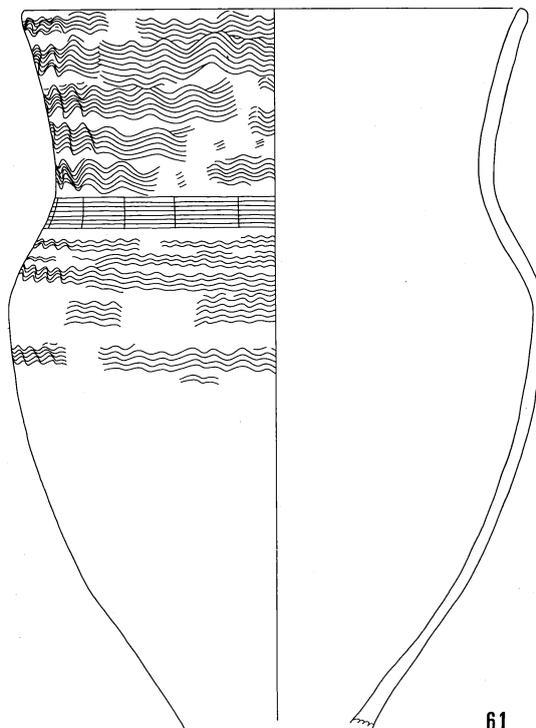
第18図 92年度調査出土土器



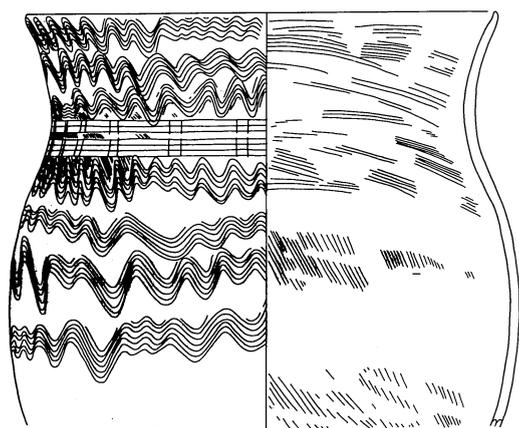
59  
12住



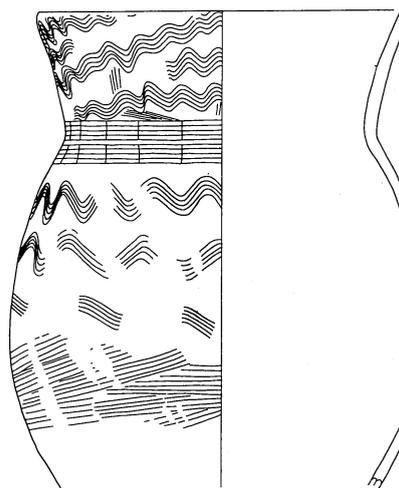
60  
12住



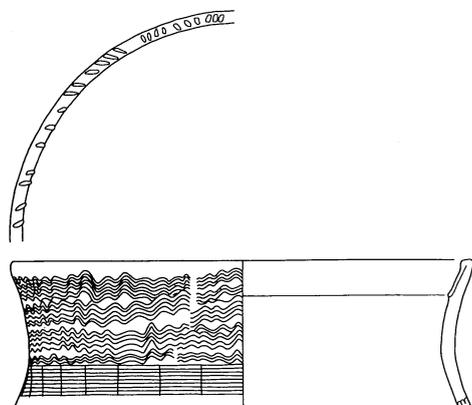
61  
トヨ9212住



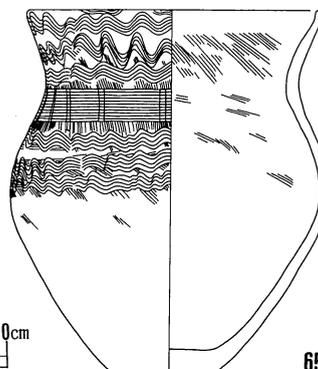
62  
No.24 トヨ92  
12住No.16.17



63  
No.26 トヨ92 II 区  
12住No.9黒・北土坑

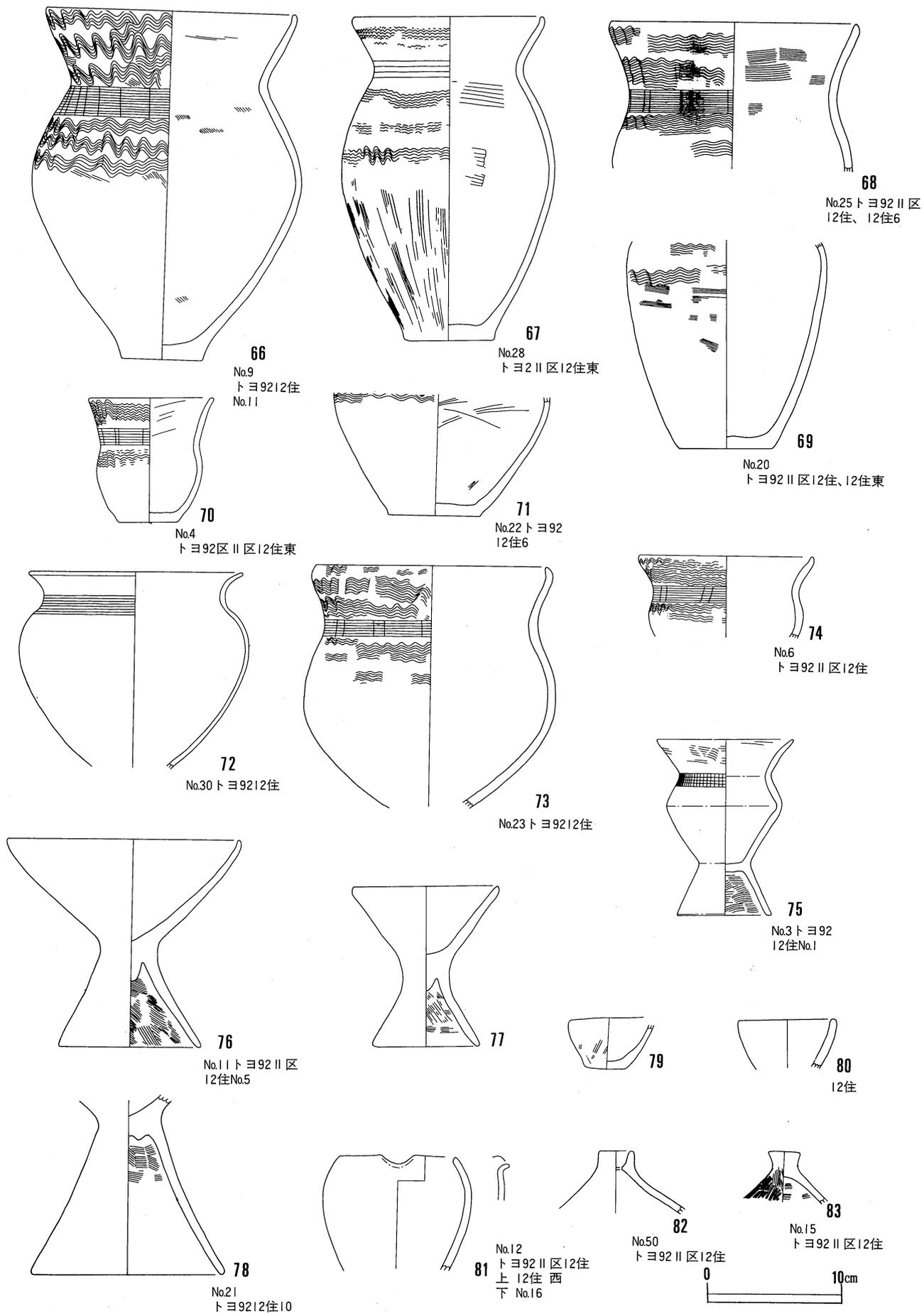


64  
No.34  
トヨ9212住

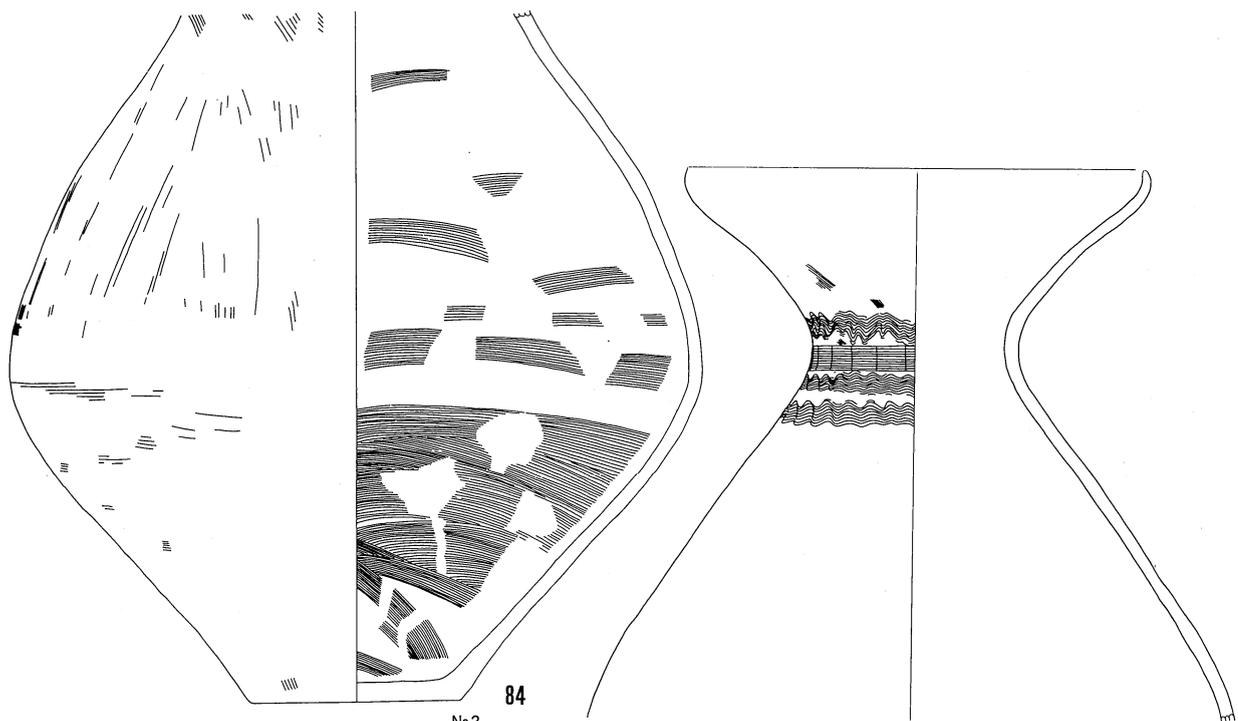


65  
No.8  
トヨ92 II 区12住No.11

第19図 92年度調査出土土器

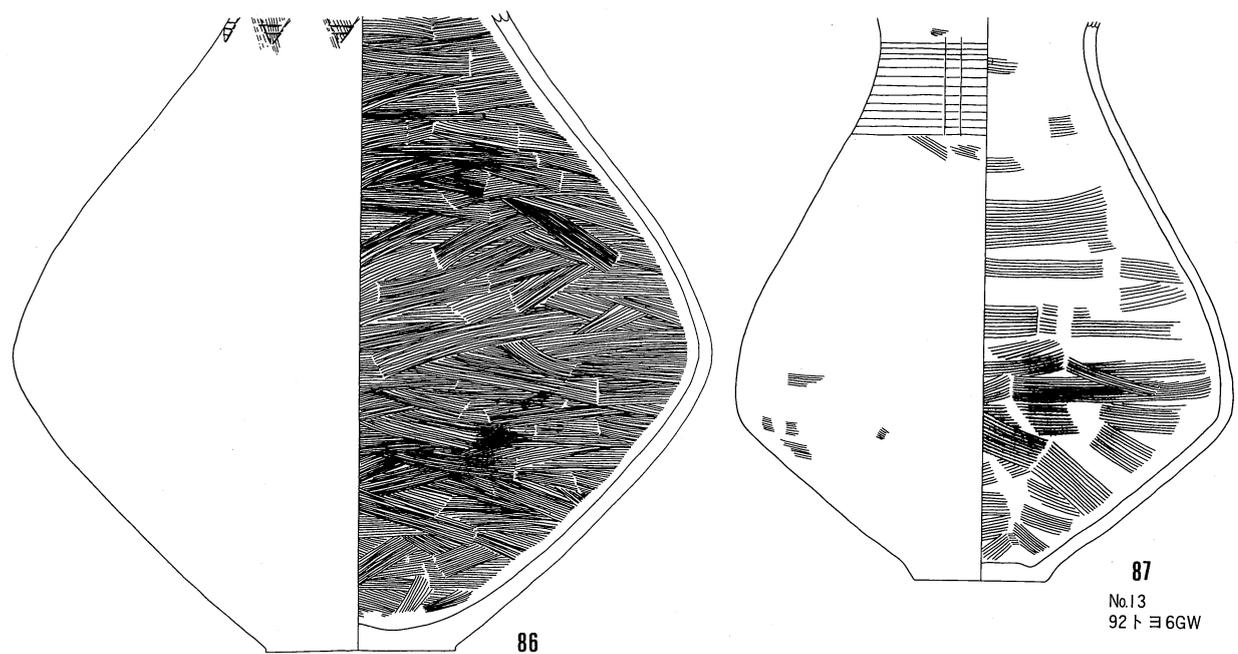


第20図 92年度調査出土土器



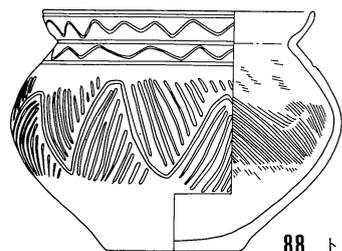
84  
No.2  
SSトヨ932 II 区  
ミゾ東わき10GW

85  
92トヨ表採

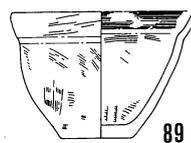


86  
No.8  
93トヨSSトヨ II 区10GW  
ミゾ、東わき

87  
No.13  
92トヨ6GW



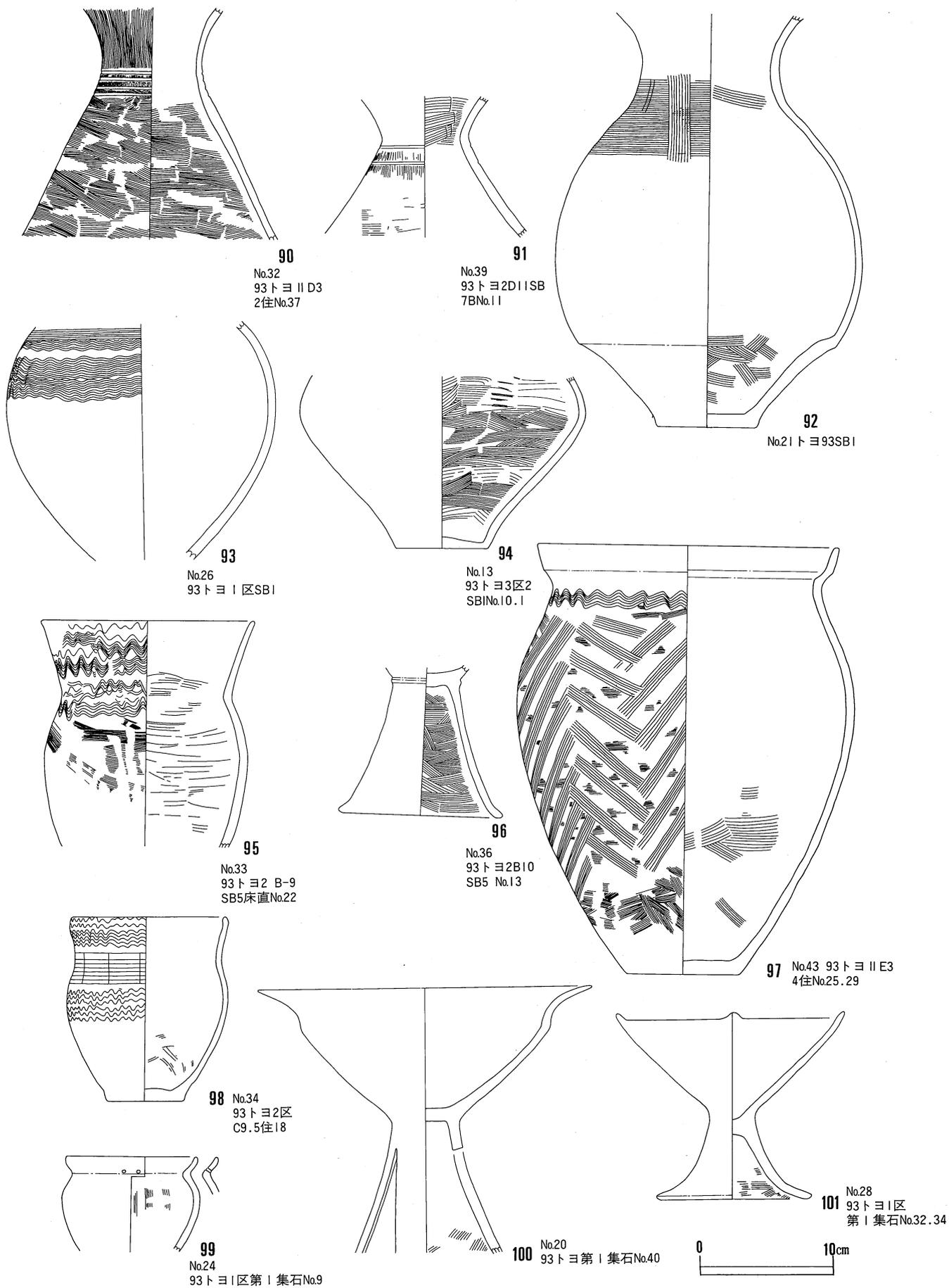
88 トヨ921集



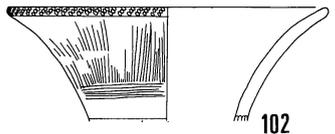
89



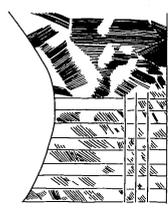
第21図 92・93年度調査出土土器



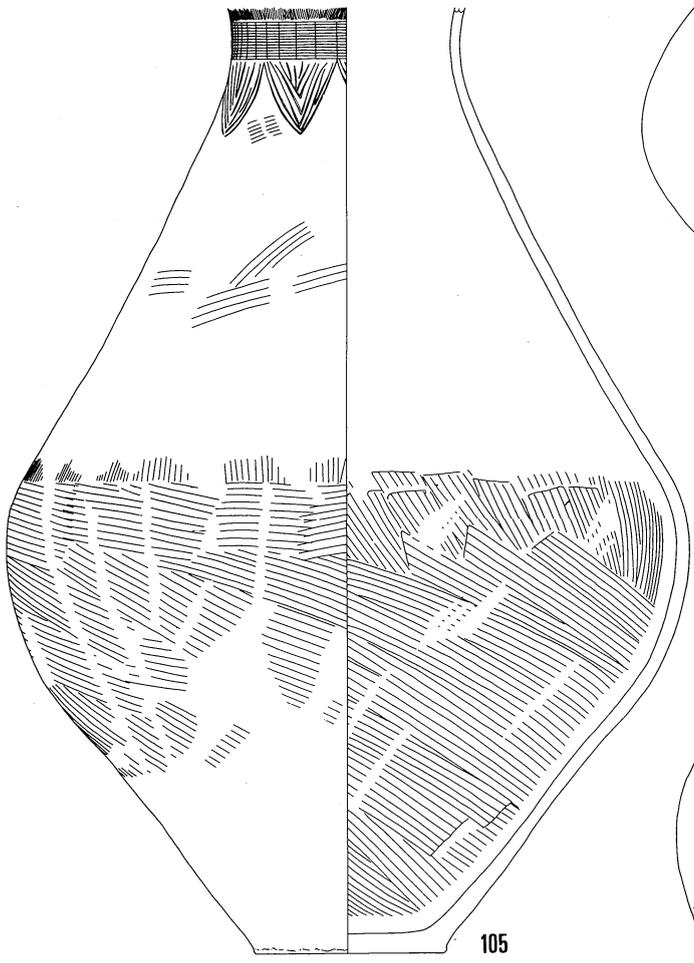
第22図 93年度調査出土土器



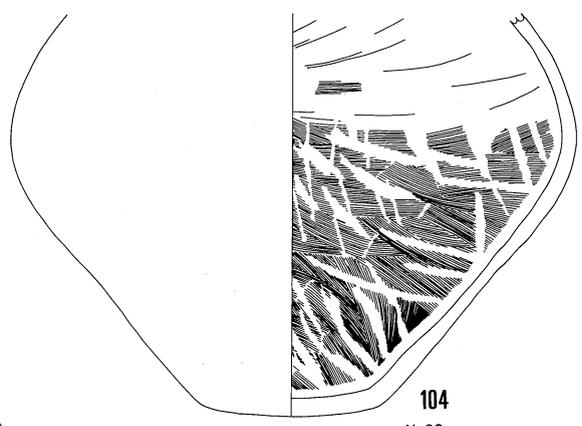
102  
No.40 93トヨ  
C11, No.5



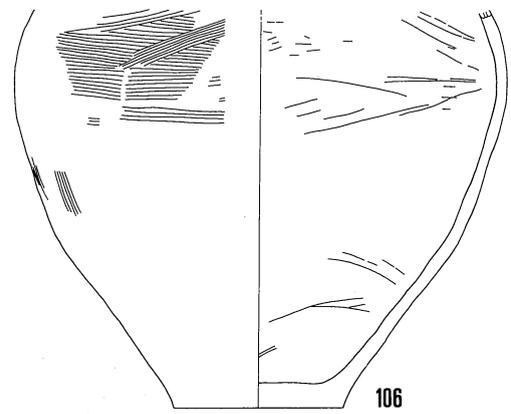
103  
No.38 93トヨ II 区  
B10No.15



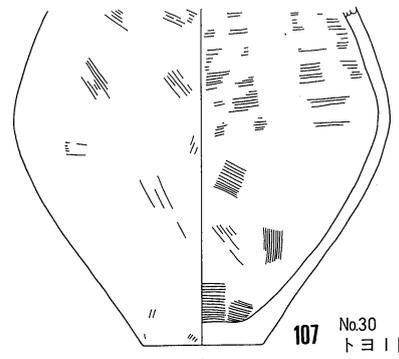
105  
No.45  
93トヨ3-D5-Q  
No.9



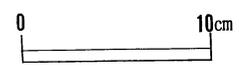
104  
No.22  
93トヨCD6



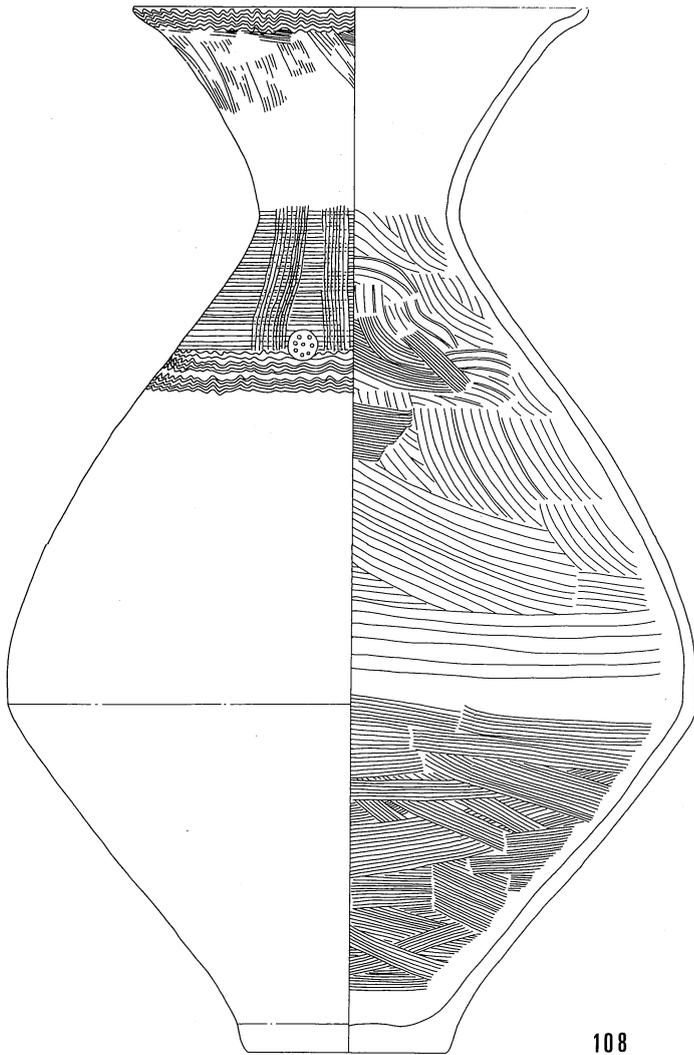
106  
No.9  
93カメ棺2号E-2No.1



107 No.30  
トヨ I 区B9.C9.D9

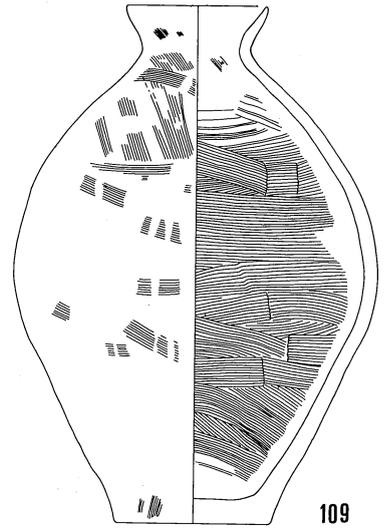


第23図 93年度調査出土土器



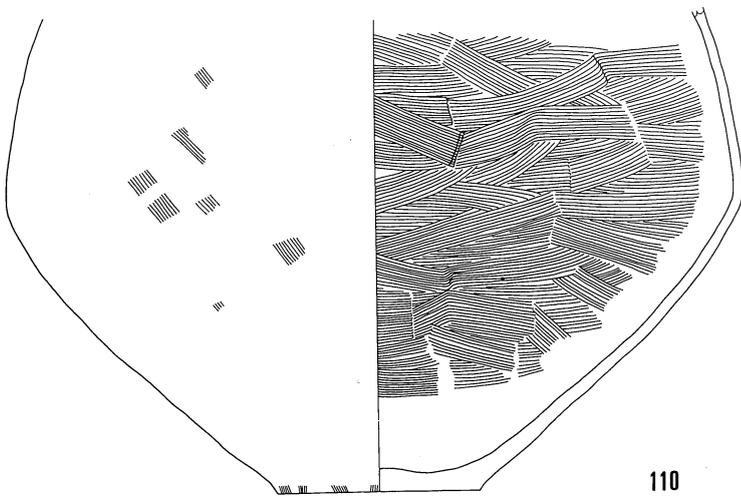
108

No.11  
 トヨ93Ⅱ区D6



109

No.14  
 93トヨ3C4No.1

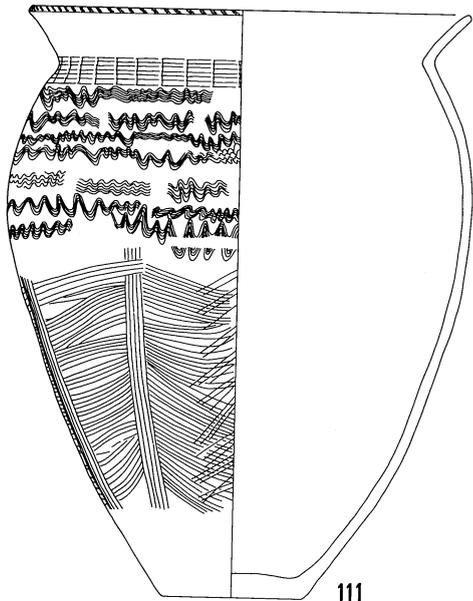


110

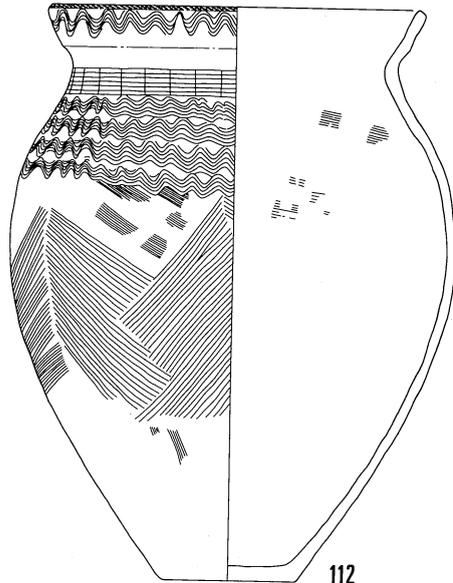
No.35  
 トヨ93E7No.5



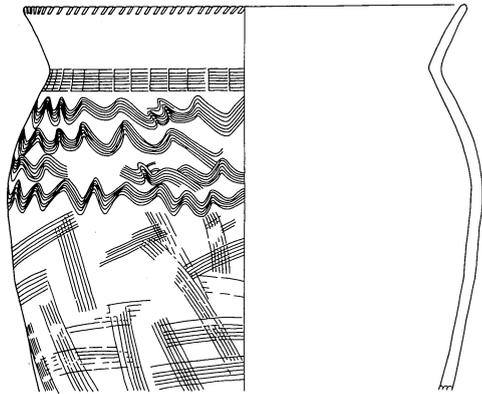
第24図 93年度調査出土土器



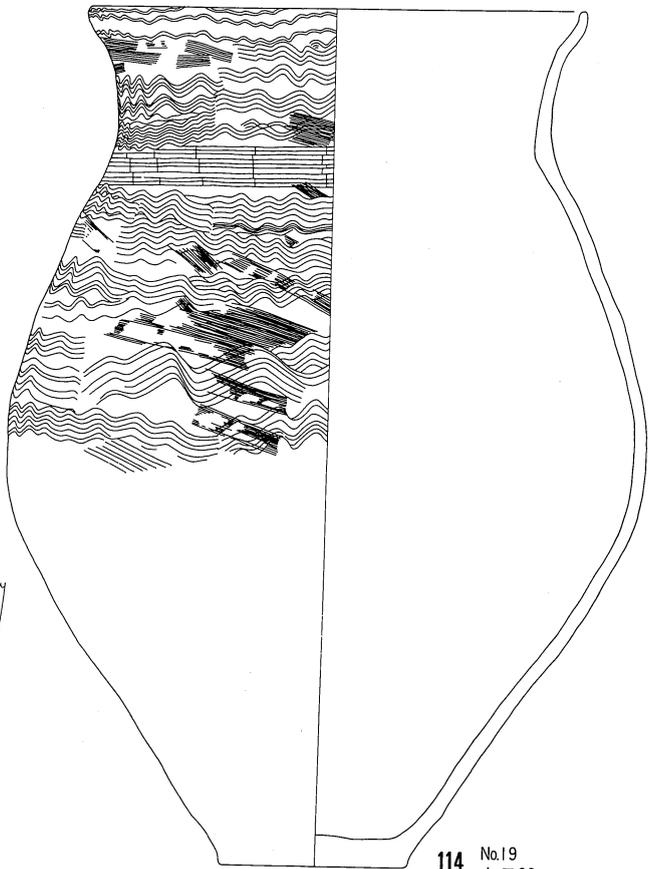
111  
No.12  
93 ト ㊦ D5  
QNo.91



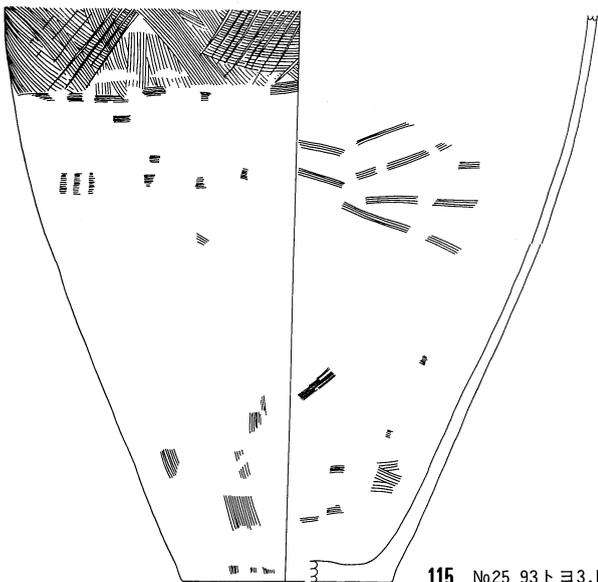
112  
No.15  
93 ト ㊦ 3D SQNo.9



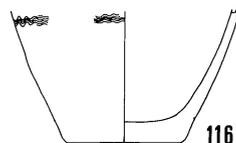
113  
No.18  
ト ㊦ 93 II 区D5No.5.7.9.10.19  
D4No.17



114 No.19  
ト ㊦ 3



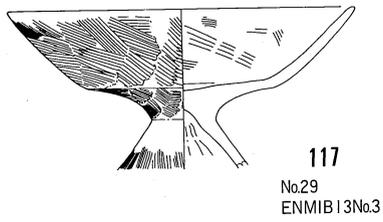
115 No.25 93 ト ㊦ 3.D6



116 No.16  
93 ト ㊦ 3区B6Q1

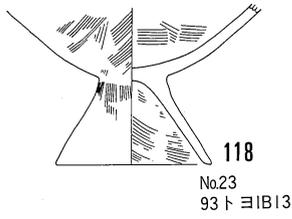


第25図 93年度調査出土土器



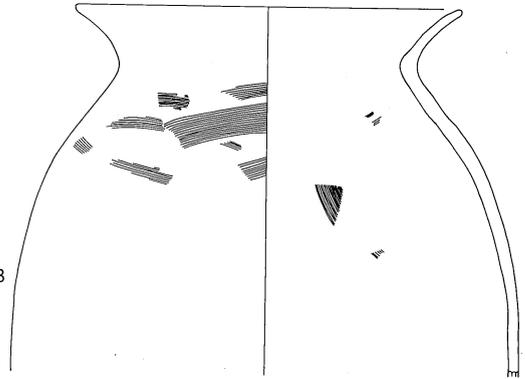
117

No.29  
ENMIB13No.3



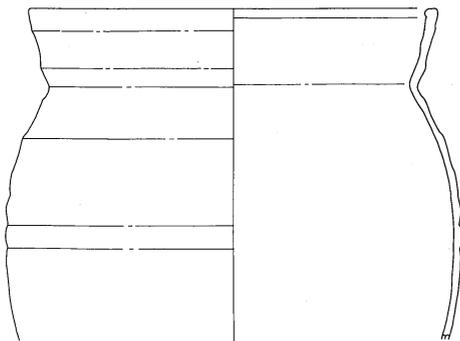
118

No.23  
93トヨIB13



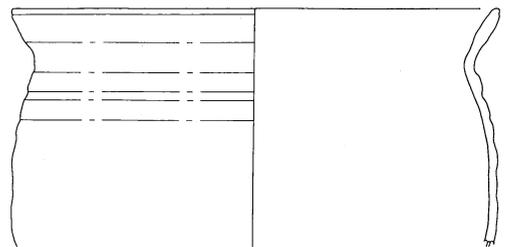
119

No.17  
93トヨ3D6



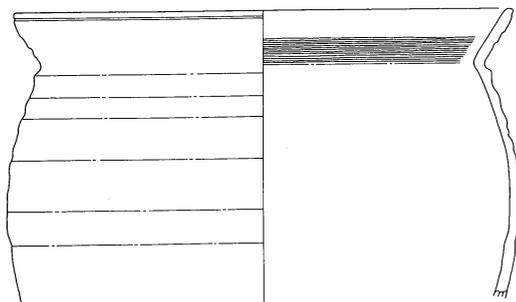
120

No.42 93トヨII  
C-31住No.34



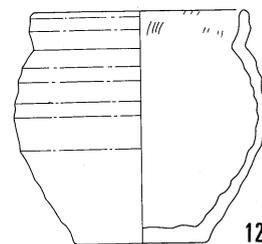
121

No.44  
93トヨII C31住



122

No.41  
93トヨ2区D3  
IV層No.10



123

No.37  
93トヨII C3住No.36



第26図 93年度調査出土土器

て立ち上がる。中野市周辺では好例を見出すことはできない。おそらく、肩をもつ器形になるものと想像している。楡描波状文が施文される。

壺型土器は5類に細分した(第28図)。

- 第1類：やや長頸な壺で、頸部が直線ぎみに立ち上がり、胴部最大径が中位にあるもの。
- 第2類：胴部最大径が下位にあるもの。口縁部の外反は小さく、比較的短い口縁部となる。さらに、撫で肩で胴部最大径が大きいもの(A)、胴部が算盤玉のようになるもの(B)、すんなりとした細身の胴部となるもの(C)の3種に分類される。
- 第3類：第2類と同様に胴部最大径が下位にあるが、口縁部が長くなる。第2類と同様にA～Bの3種に細分される可能性がある。
- 第4類：口縁部の外反度が強く、長さも長いものである。場合によっては、口縁部が反り返るようになるものもある。
- 第5類：頸部がすんなりとして、口縁部が大きく開くもので、頸部に篋ないし楡で平行する密度の高い直線文が施文されるもの。

これらの分類については飽くまでも、相対的な区分であり、属性の集合として定義しているわけではない。これは各器形が連続的に変化しているためである。今後、資料の増加に伴って変更を余儀なくされることもある。

#### (中期後半の段階区分)

さて、これら細分された各器形の遺構単位の組み合わせから、おおよそ次のような変遷段階を考えている。

- 第1段階：カメ型土器1類+壺形土器1類が組み合わせられる段階。
- 第2段階：カメ型土器2類+壺1類+2類+3類が組み合わせられる段階。
- 第3段階：カメ型土器3類+4類+壺型土器3類+4類が組み合わせられる段階。
- 第4段階：カメ型土器4類+5類+壺型土器4類

+5類が組み合わせられる段階。

第5段階：カメ型土器6類+7類+壺型土器5類が組み合わせられる段階。

第6段階：カメ型土器7類+壺型土器5類が組み合わせられる段階。

がある。

栗林式土器については、以上のように6段階に区分を試みた。この6段階区分は栗林遺跡の報告(1996)に準じたものではあるが、栗林遺跡の報告を脱稿後、本遺跡の資料を観察した結果、5及び6段階については、確かに栗林式土器との系譜的な連続を認めることができるものの、本地域の弥生土器の変遷を調和的に区分するという意味から、またすでに弥生後期初頭に位置づけられた吉田式という型式名称が存在することからも、現段階では、本来の栗林式とは分離しておくのが妥当という結論に達した。

さて、今回の資料は壺型土器5類に分類したものに相当する。壺5類は吉田式の壺型土器の範疇で捉えられるものではある。

しかし、一方では吉田式とされる段階の土器群を箱清水式とされる土器群から分離する必要が生じる。そのために、まず該当する土器群を分類する必要がある。

#### (後期土器群の分類)

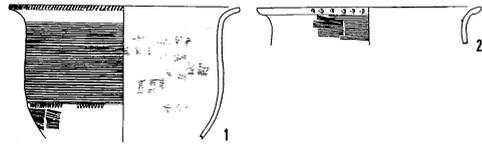
カメ型土器は8～13類の6類に分類される(第30図)

第8類：7類に比べ口縁部が長くなるが、その先端は7類と同様につままれたように内湾する。胴部の最大径は中位にあり、口縁径よりも大きい。

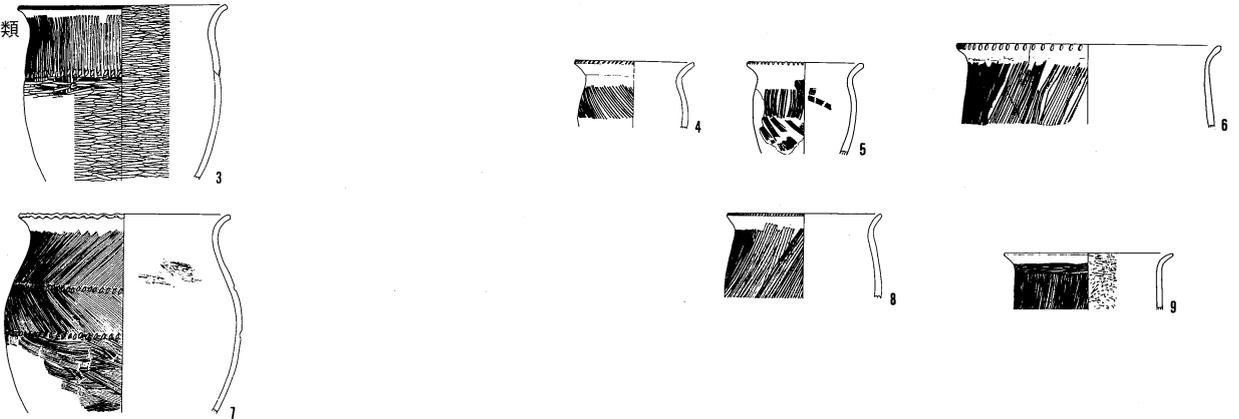
第9類：口縁はさらに長くなり、先端部の内湾は顕著で無くなる。口縁から胴部に至る頸部の屈曲は緩やかになる。

また、胴部全体のプロポーションが丸味を帯び、胴部最大径から底部にいたる曲線も緩やか曲線を描くようになる。

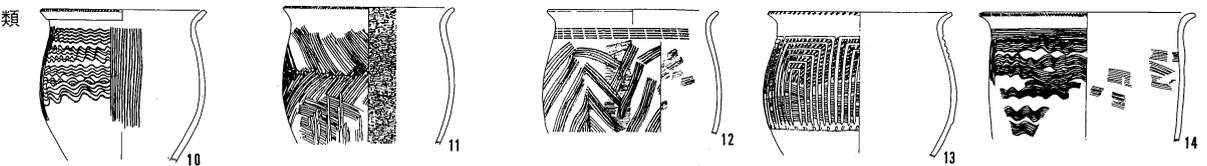
第1類



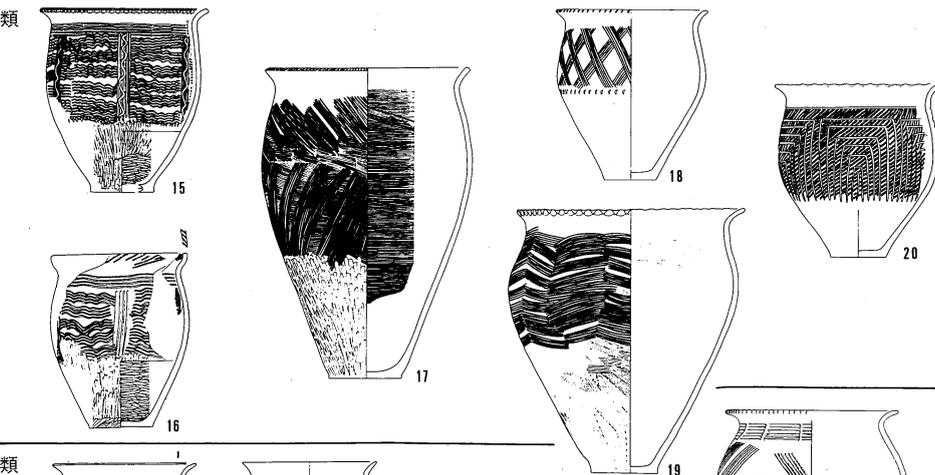
第2類



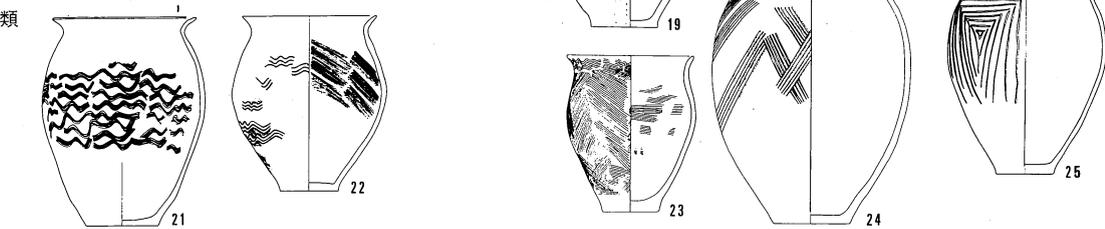
第3類



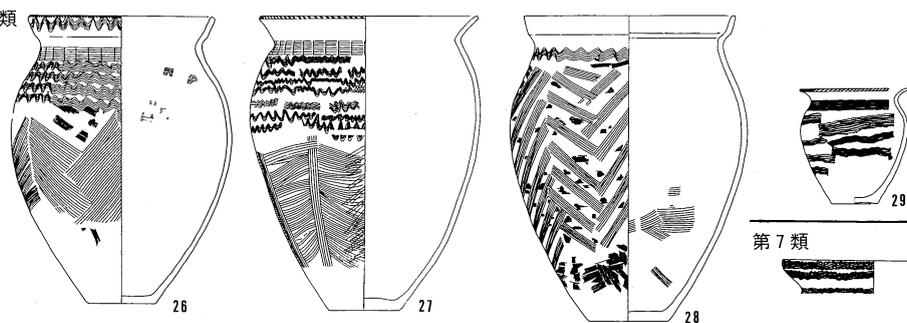
第4類



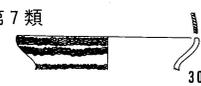
第5類



第6類

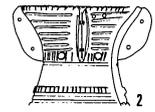
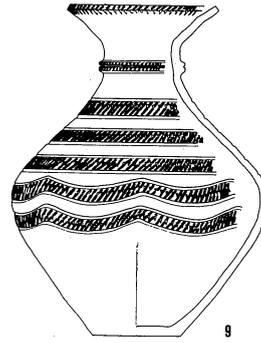
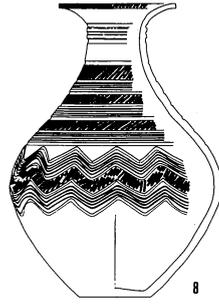
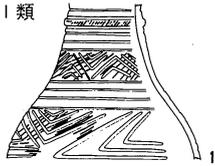


第7類

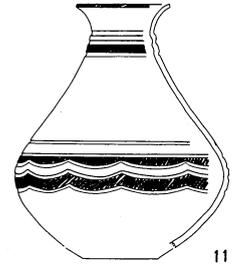
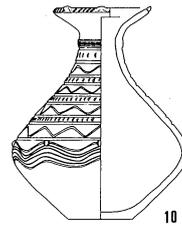
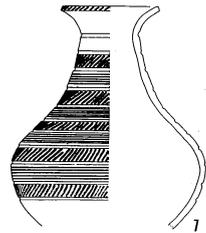
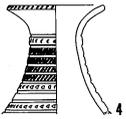
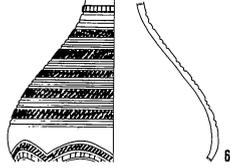
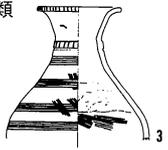


第27図 栗林式カメ型土器の分類

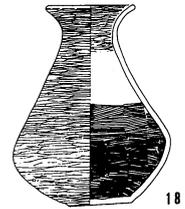
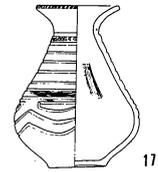
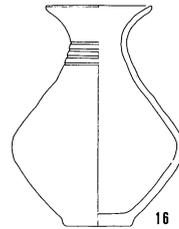
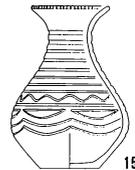
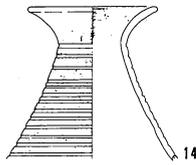
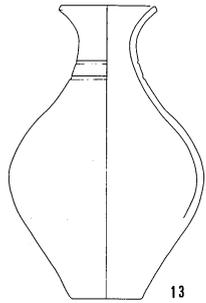
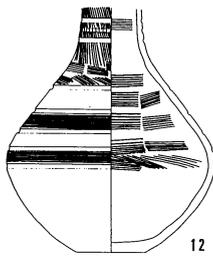
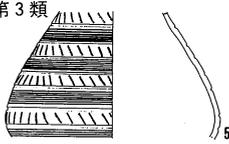
第1類



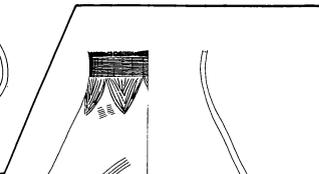
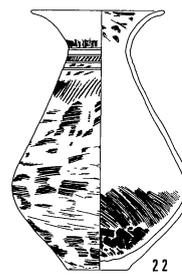
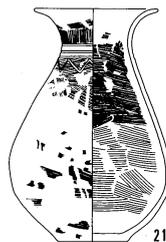
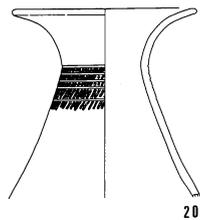
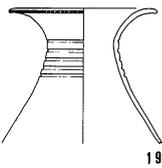
第2類



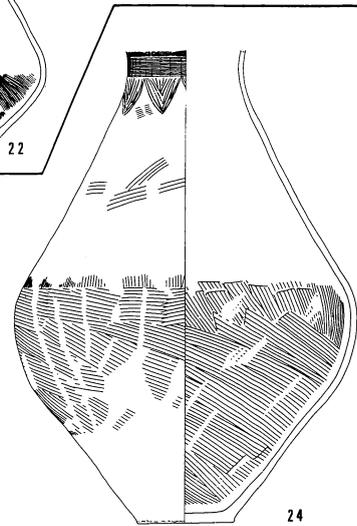
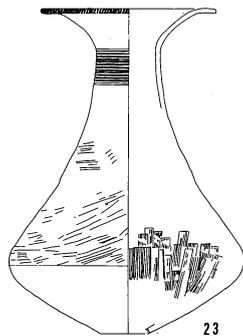
第3類



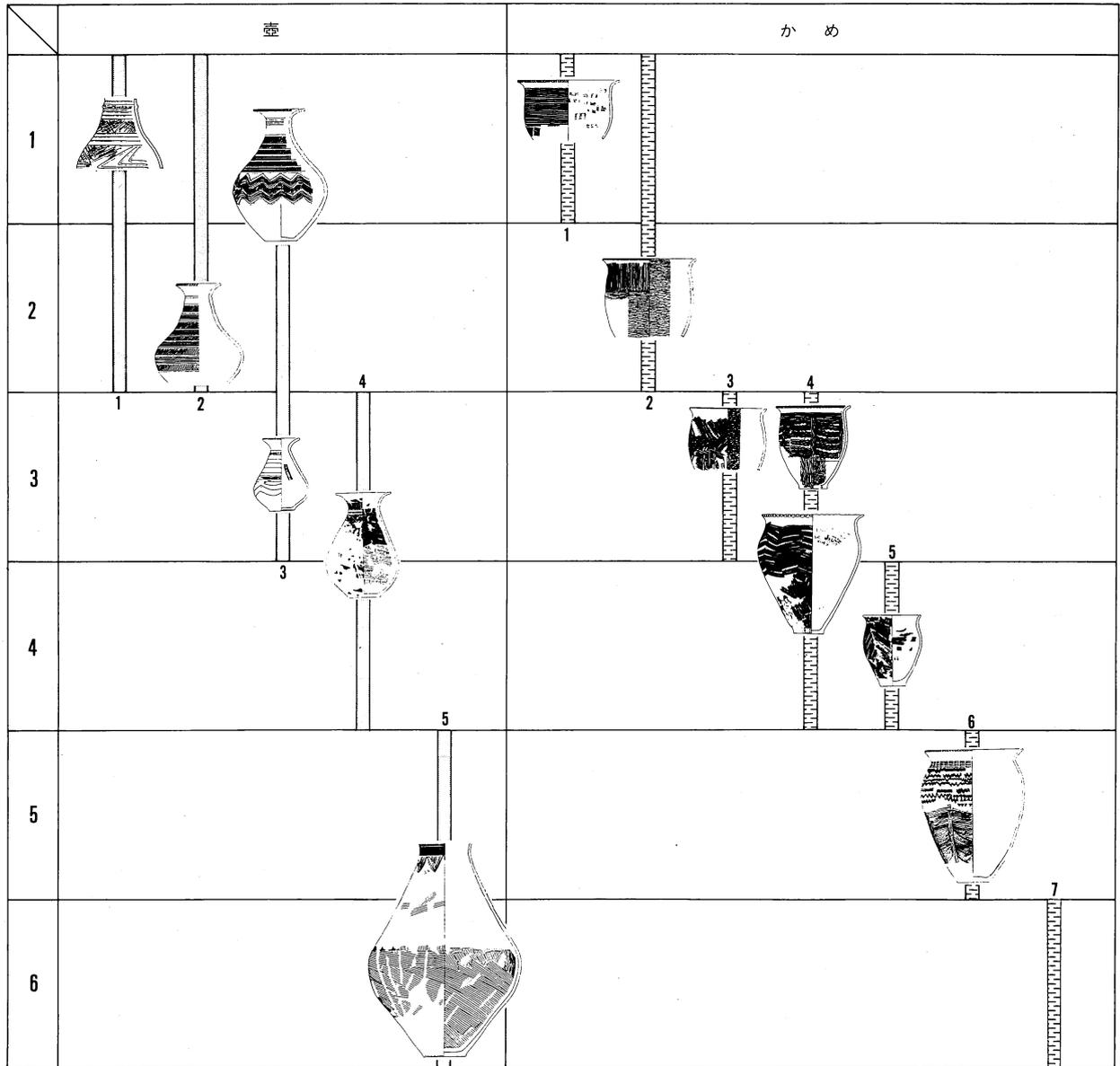
第4類



第5類



第28図 栗林式壺形土器の分類



第29図 中期後半の変遷模式図

第10類：口縁先端の内湾が見られず、器形全体が細身になる。胴部最大径と口縁径がほぼ等しくなる。

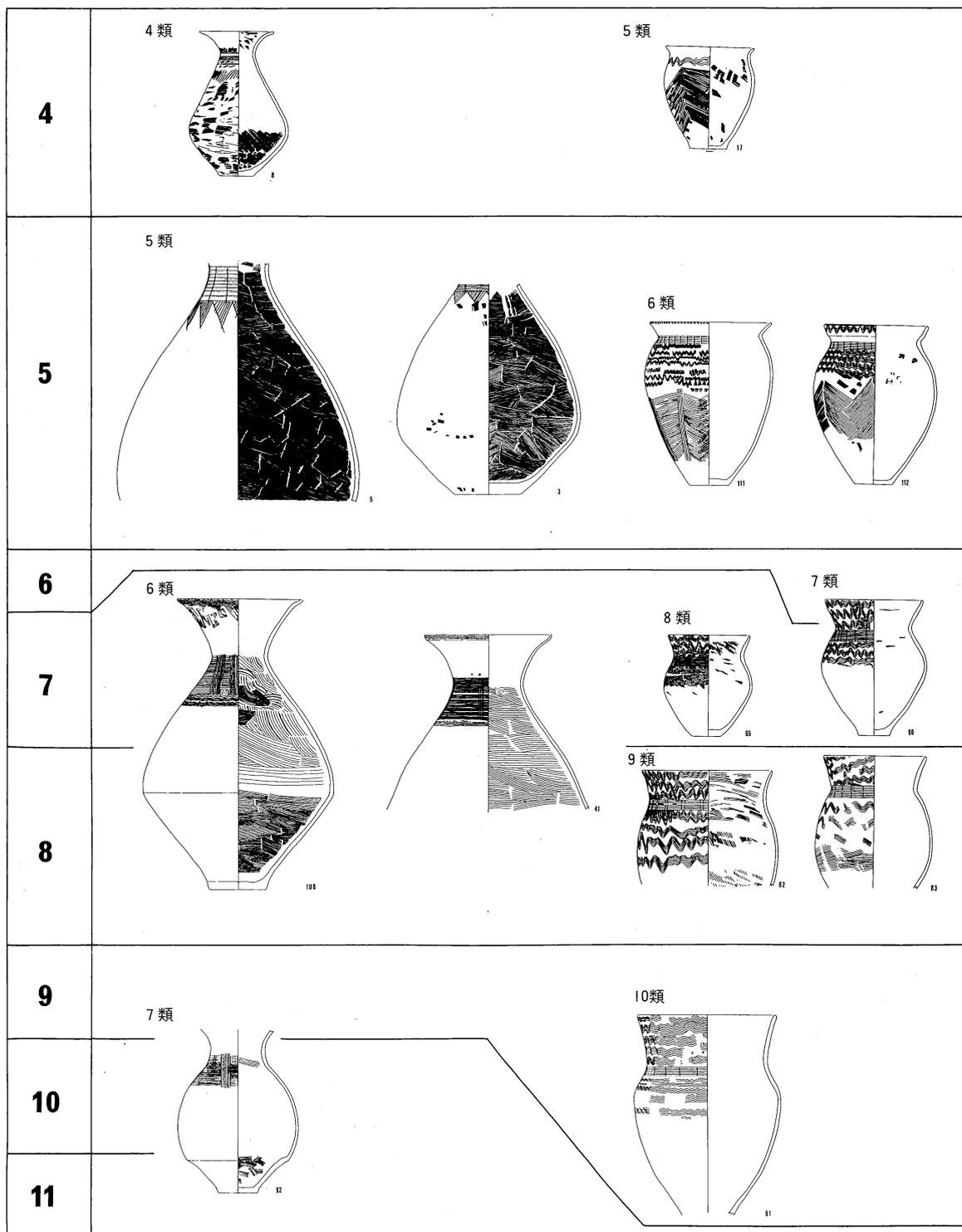
以上が、本遺跡のカメ型土器の分類であるが、七瀬遺跡や間山遺跡、安源寺遺跡例を加味すると吉田一箱清水式土器のカメ型土器の類型はやや増える。

第11類：胴部が肩を持つようになり、口縁部の描

く曲線と胴部の描く曲線が連続しない。口縁には素縁のものや折り返し口縁、面取りをした口縁がある。

第12類：頸部のくびれが極端弱くなり、頸部文様も施文されなくなる。

第13類：口縁がくの字状に外反し、球形の胴部をもつもの。



第30図 後期変遷模式図及び器形の分類

壺形土器は6～7類の2類に分類される。

6類：口縁が大きく外反し、胴部中位に最大径をもつ。口縁先端はやや内湾する。胴部の器形は算盤玉状を呈するが、胴部最大径から

底部にかけては大きく屈曲しない。頸部はやや細く、楕描直線文が施文され、その下に楕描波状文が施文される。また、頸部に横走する楕描直線文を区切るように、縦

方向に櫛描直線文が施文されている。

7類：口縁径が大きく、胴部最大径は下半部にあり、綾をつくりながら、屈曲して底部にいたる。また、6類に比して、口縁径や頸部径が大きい。

#### (外来形土器)

この他に、東海地方、北陸地方の影響を受けたと考えられる土器群が伴出する。これらは独自に細分し、これまで分類したどの類と共伴関係をもっているか検討が必要である。これについては今後の課題としたい。

#### (段階区分)

分類した各類の組み合わせを考慮すると、都合5段階の変遷段階が想定される(第30図)。

- 7段階：カメ8類+壺6類
- 8段階：カメ9類+壺6類
- 9段階：カメ10類+壺7類
- 10段階：カメ11類+壺7類
- 11段階：カメ12類+カメ13類+壺7類?

このように、中野市における弥生土器を段階区分すると、中期後半から、11段階におよぶ変遷段階が想定される。

これらの段階区分をこれまでの型式編年に対応させると、1～3段階が栗林式、4段階が百瀬式、5・6段階が吉田式、7・8段階が箱清水式土器の前半段階(尾崎式)、9・10段階が箱清水式、11段階が箱清水式以後(御屋敷式)に相当する段階と考えられようか。

以上のように、中野市における弥生時代中期後半から後期にいたる弥生土器の段階区分を試みた。この試みは形態的な変遷を想定したラフな試論である。本稿で敢えてこのような弥生土器の変遷段階を想定したのは、本地域における弥生土器のいわゆる型式編年が、近年の資料の飛躍的な増加を目の前にして、

流動的な状況にあるからである。

山内型式論の立場に立てば、各型式は全体の流れのなかで、均衡を保った時間幅をもつものとして、区分されなければならない。

しかしながら、本地域の弥生土器の型式区分は資料の希少さが原因となって、一つの土器群(何らかの形で一括資料とみなす)を単位として、それ自身をそのまま一つの型式として分析する傾向が強かったということができよう。

各遺跡や各遺構における一括資料はすこしづつ変化している土器群の特定の部分が化石化したものであり、イメージされている弥生土器全体の変遷過程を秩序づける型式編年に適当なものかどうかを検討する必要がある。たとえば、A1、A2、……A5、A6と変化する土器群があったとしよう。たまたま、遺構からA1～A3が一括資料として出土した。これを即、型式あるいは変遷段階として把握することはできまい。型式区分や段階区分は、A1からA6までの変化の過程が概観されることによりはじめて型式設定が可能となる。

これまでの当該地域での型式設定、栗林式の細分、箱清水式の細分は極めて資料数の少ない段階で行われ、土器群全体の変容が捉えにくい、あるいは捉えることができない状況下で行われてきたがゆえに、今日、いくつかの課題を抱えたといえよう。

一方、今日では逆に、急増した資料を目の前に、その多様さに圧倒されているというのが現状であろう。

これを解決するにはまず、多様な土器群を一定の分類表に整理する必要がある。すくなくとも、狭い地域での弥生土器全体の変遷過程を概観し、それぞれの資料の評価しなければならない。もちろん、現段階ですべての資料がそろっているわけではない。しかしながら、不完全ながらもこの作業を繰り返すことにより、徐々にその姿は見えてくるであろう。

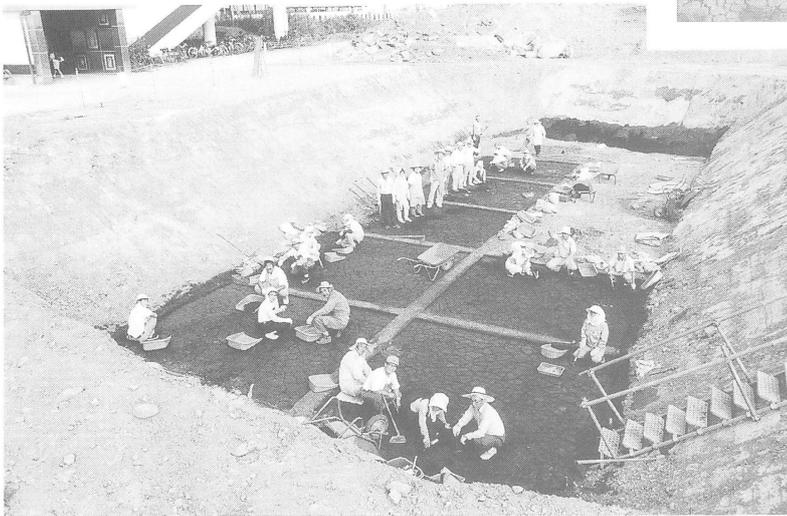
本稿の段階区分は今回出土した資料を評価するために、試みたものであり、今後多くの修正が必要になると考えている。



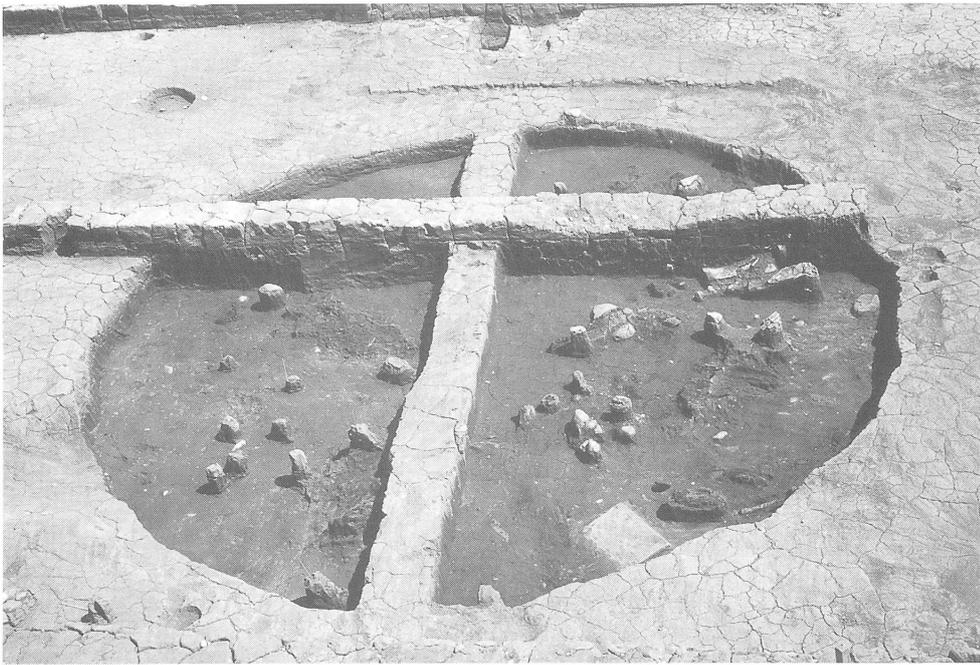
調査区



調査区



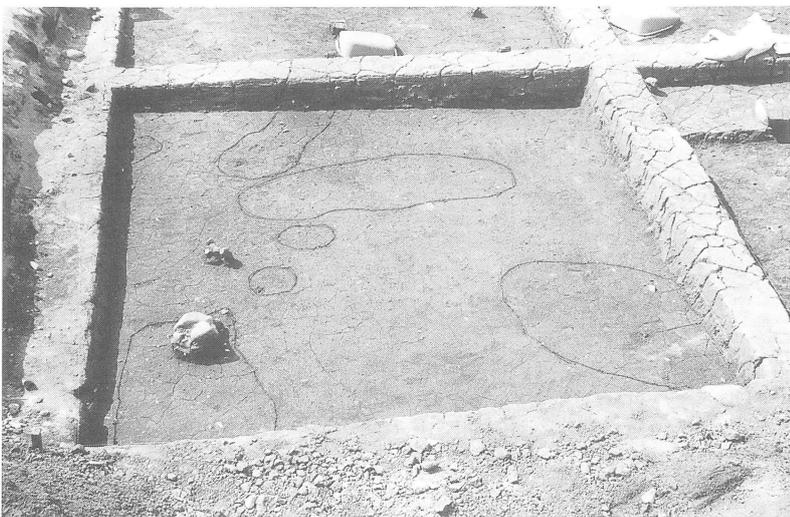
調査風景



1号住居遺物出土状況



1号住居



土坑墓検出面



4号土坑墓



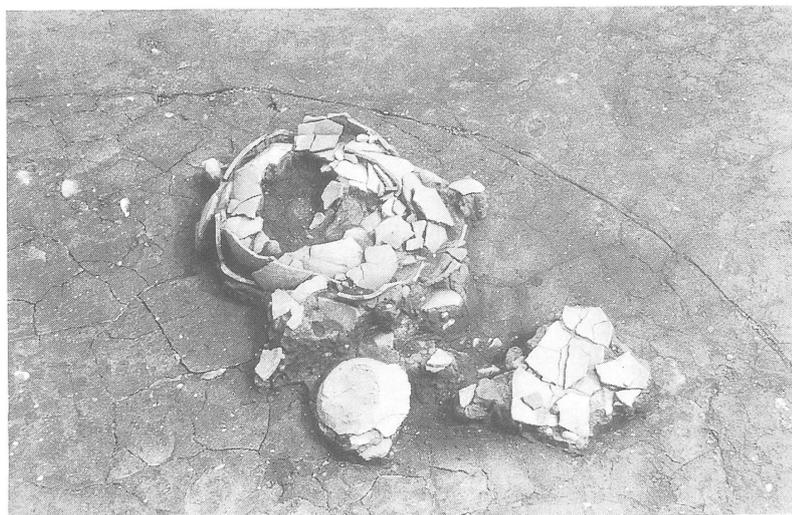
5号土坑墓



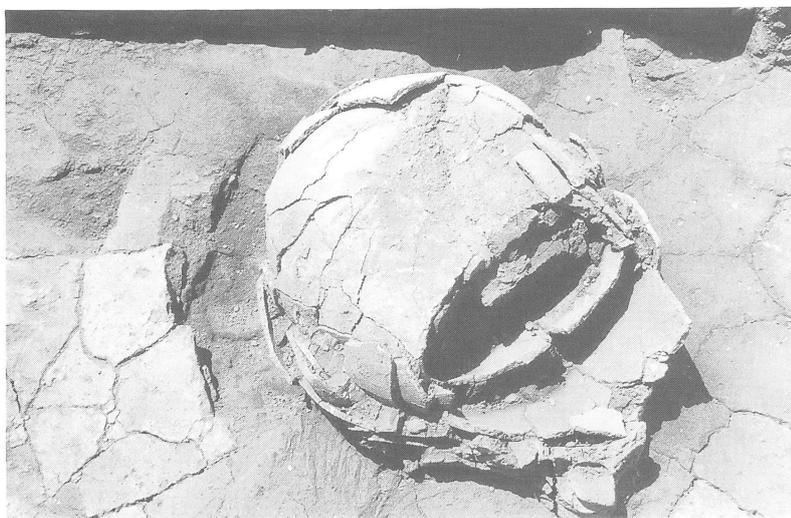
1号土坑墓



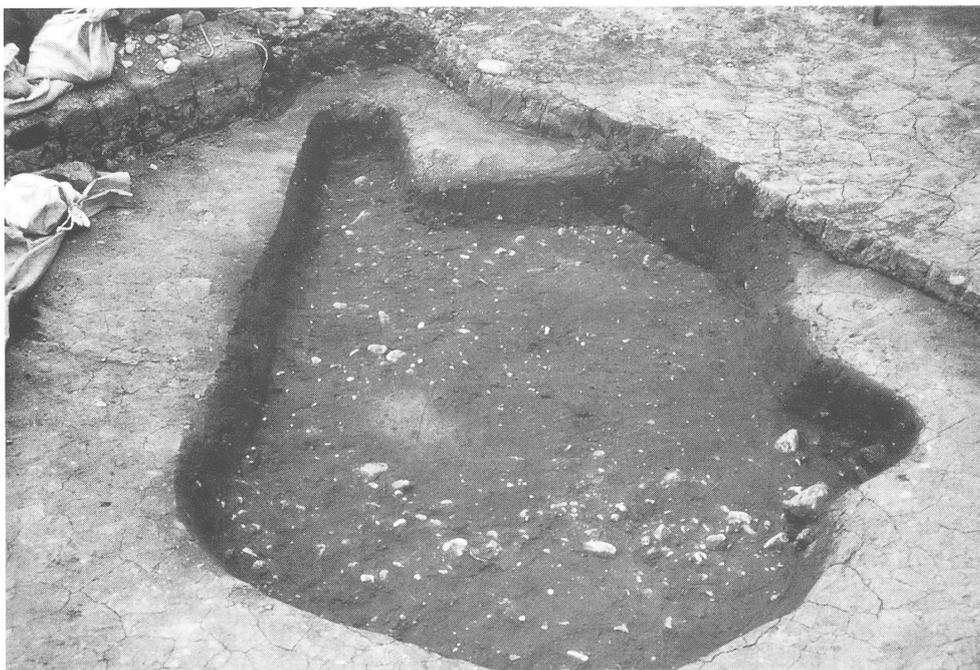
6号土坑墓



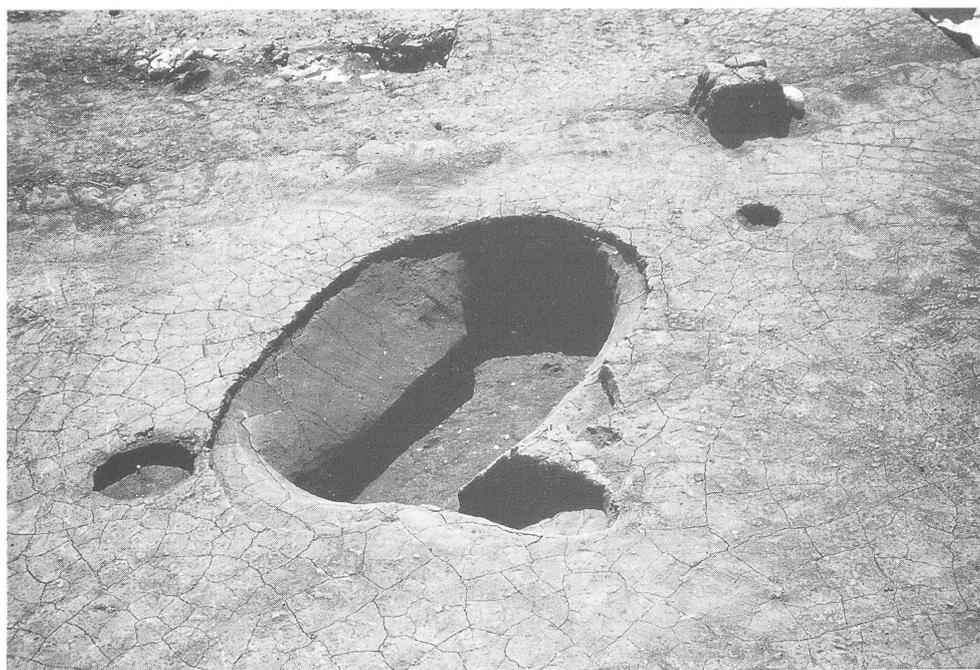
壺棺



壺棺



2号土坑墓



3号土坑墓



西条・岩船遺跡群発掘調査概報

印 刷	平成 8 年 3 月 20 日
発 行 日	平成 8 年 3 月 20 日
編 集 ・ 発 行	中野市教育委員会
	中野市三好町 1 - 3 - 19
印 刷 所	蔦友印刷株式会社



